

富田林市埋蔵文化財調査報告33

平成13年度

富田林市内遺跡群発掘調査報告書

2002・3

富田林市教育委員会

## はじめに

富田林市には、飛鳥時代に創建された南河内最古の寺院である新堂廃寺跡と共に、その屋瓦を焼いたオガソジ池瓦窯跡、さらに寺院を創建した人物の墓と考えられるお龜石古墳という、飛鳥時代の環境を色濃く残す重要な歴史ゾーンがあります。私たちは、これらの遺跡を有効に活用し、後世にしっかりと残していく必要があると考え、国の史跡指定を受けることを目標に1997年度から5カ年計画の範囲確認調査を行って参りました。

その最終年に当たる2001年度は、お龜石古墳の範囲確認調査を行いました。お龜石古墳は、その特徴的な形態から、古くから考古学界において非常に注目を集めてきた古墳であり、飛鳥時代の古墳を考える上では欠かすことのできない遺跡と言えます。

今回の調査は、今まで確認できていなかった古墳の形状と大きさを明らかにすることを目標に行いました。その結果、現状の地形から從来円墳と考えられてきたお龜石古墳が方墳であることを確認し、その大きさも推定しうるまでの成果を得ることができました。

本書は、その発掘調査成果を収録したものです。埋蔵文化財へのご理解を深めていただくために活用していただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては土地所有者であります中野昌幸氏、中野覚氏、中和物産株式会社に多大なる協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。また調査期間中お龜石古墳に足を運んでくださった市民の方々、暖かいご指導を頂いた関係者各位にも合わせて厚く御礼申し上げます。今後とも、本市埋蔵文化財への一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

富田林市教育委員会

教育長 清水富夫

## 例　　言

1. 本書は富田林市教育委員会が平成13年度に、国庫補助をうけて実施したお龜石古墳の範囲確認調査の調査概要である。
2. 調査は富田林市教育委員会文化財保護課の横山成己が担当し、平成13年11月19日に着手し、平成14年3月29日に終了した。
3. 現地調査にあたっては中辻亘、今西淳、瀬戸直子の協力を、また内業調査にあたっては栗田薰、楠木理恵、瀬戸直子、前野美智子、山本節子の協力を得た。
4. 写真撮影は阿南辰秀、伊藤慎司、中辻亘、横山成己が、遺構実測は今西淳、瀬戸直子、横山成己が、遺物実測・拓本は楠木理恵、横山成己が、製図は横山成己が行った。
5. 本書の執筆および編集は横山成己が行った。
6. 本書で使用した方位は国土座標第IV系に基づく座標北と磁北を表示し、標高は東京湾標準海面値で表示した。また、土色については小山・竹原編『新版標準土色帳』を使用した。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
9. 調査の実施および本書の作成にあたっては、下記の諸氏に有益なご助言、ご協力を頂きました。記してここに感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)

和泉大樹、伊藤聖浩、奥田尚、笠井敏光、西光真治、佐々木理、瀬戸哲也、竹谷俊夫、立岡和人、中村浩、西山昌孝、林部均、樋口吉文、藤井利章、藤田徹也、堀田啓一、水野聰哉、山本彰、横山佐夜子、吉沢貴、吉田晶

### 【新堂廃寺等調査指導委員会】

北野耕平（神戸商船大学名誉教授） 栄原永達男（大阪市立大学教授）  
森 郁夫（帝塚山大学教授） 廣瀬和雄（奈良女子大学教授）  
猪熊兼勝（京都橘女子大学教授） 菊田哲郎（京都府立大学助教授）  
金田章裕（京都大学大学院教授）  
松村恵司（奈良文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部考古第2調査室長）  
玉井 功（大阪府教育委員会文化財保護課指定文化財グループ補佐）

## 本文目次

はじめに

例言

I 位置と環境	1
II 調査に至る経過	2
III 調査区の設定	6
IV 調査成果	6
1 第1調査区	6
2 第2調査区	11
3 第3調査区	13
4 第4調査区	14
5 第5調査区	16
6 第6調査区	20
7 第7調査区	20
8 第8調査区	26
9 第9調査区	26
V 出土遺物	29
1 中世・近世遺構出土遺物	29
2 出土須恵器類	33
VI まとめ	34

## 挿図目次

第1図 お龜石古墳周辺遺跡分布図	3
第2図 新堂廐跡・オガソジ池瓦窯跡・お龜石古墳位置図	5
第3図 お龜石古墳現況測量図・調査区配置図	7・8
第4図 第1調査区平面図・断面図	9
第5図 第2調査区平面図・断面図	12
第6図 第3調査区平面図・断面図	13
第7図 第3調査区北壁・東壁墳丘盛土断面図	15
第8図 第4調査区・第5調査区平面図・断面図	17・18
第9図 墳丘南西部川原石(閉塞石)検出状況平面図	19
第10図 第6調査区平面図・断面図	21
第11図 第7調査区平面図・断面図	22
第12図 第7調査区南壁墳丘裾部盛土断面図	23
第13図 第7調査区南壁墳丘盛土・墓壙埋土断面図	25
第14図 第8調査区平面図・断面図	27

第15図	第8調査区中世遺構面平面図	27
第16図	第9調査区平面図・断面図	28
第17図	中世遺構出土土器・土製品	31
第18図	中世遺構出土平瓦	32
第19図	中世・近世遺構出土鉄器類・銅錢	33
第20図	出土須恵器類	34
第21図	お龜石古墳墳丘プラン推定図	35・36

## 図 版 目 次

- 図版1 (上) 新堂廃寺跡・オガニジ池瓦窯跡・お龜石古墳全景 南東から  
           (下) お龜石古墳全景 南上方から
- 図版2 (上) お龜石古墳開口部 南東から  
           (下) お龜石古墳主体部 北西上方から
- 図版3 (上) 第1調査区全景 北から  
           (下) 第2調査区北半部 北から
- 図版4 (上) 第3調査区全景 西から  
           (下) 第3調査区盛土断面 西から
- 図版5 (上) 第4調査区全景・閉塞石群 北東から  
           (下) 第5調査区北半部 北から
- 図版6 (上) 第6調査区盛土残存部分 南東から  
           (下) 第7調査区中世土塙 北西から
- 図版7 (上) 第7調査区墳丘裾部 北東から  
           (下) 第7調査区墳丘裾部盛土断面 北東から
- 図版8 (上) 第7調査区墓壙埋土断面 北東から  
           (下) 第8調査区北東半部 北東から
- 図版9 (上) 第8調査区墳丘裾部盛土断面 東から  
           (下) 第9調査区東壁断面 南西から

# お 亀 石 古 墳

## I 位置と環境（第1図）

お亀石古墳（1）は、市内中央部を北流する石川の西岸に南北方向にのびる羽曳野丘陵上に位置している。羽曳野丘陵の東には石川が形成した段丘が大きく広がっており、古墳の南東約0.3kmには、飛鳥時代に創建された古代寺院である新堂廃寺跡（2）が位置している。また、両者の間には元来谷筋であったものを堰き止めて造られた御觀寺池という名の灌漑用水池が存在するが、その北堤にはオガンジ池瓦窯跡（3）という2基の瓦窯が確認されている。この窯跡では、新堂廃寺の屋瓦と共に亀石古墳の石櫛外護施設として使用されている平瓦を焼成していたことが判明している。このように、寺院とそれに用いる屋瓦の生産施設、また寺院を建立した人物が埋葬されたと考えられる墳墓の三者が非常に近接して確認されているのは、全国的にも非常に希有な事例と言える。

お亀石古墳周辺の羽曳野丘陵上には、現存するものは少ないが、古墳時代前期より墳墓が造営されていたことが確認されている。

古墳時代前期の古墳としては、真名井古墳（6）、鍋塚古墳（4）をあげることができる。真名井古墳は、全長約60mの前方後円墳であり、明確な段築は確認されていないものの、埴輪列を3段に廻らせていたようである。粘土櫛に割竹形木棺を内部主体としており、三角縁三神三獸獸帶鏡と共に多くの遺物が出土している<sup>(註1)</sup>。鍋塚古墳は、直径約25mの円墳であり、埴輪列を1列廻らせている。簡素な木棺直葬の主体部と考えられ、鉄族と共に方形板皮継短甲が出土している<sup>(註2)</sup>。両者とも現在は宅地造成のために消滅してしまったが、旧地形としては東に平地部を望む羽曳野丘陵支脈の突端に位置するという特徴を有している。また発掘調査は行われていないが、同様の立地をとる宮神社裏山古墳群1号墳（5）も、古墳時代前期に属する前方後円墳である可能性が高い<sup>(註3)</sup>。

古墳時代中期の古墳は市内北部では確認されていない。石川西岸では、市内中部にわずかに川西古墳、新家古墳<sup>(註4)</sup>の2基が確認されているに過ぎない。この2基は、羽曳野丘陵下の石川に形成された段丘上に位置している。

古墳時代後期に至ると、羽曳野丘陵上には平古墳群、宮神社裏山古墳群（5）が築かれる。いずれも群集墳の形態をとるが、市内南部石川東岸に比べると極めて希薄な分布状況を示している。しかしながら、新堂廃寺跡の東に位置する中野遺跡（17）の西半部からは、6世紀後半以降の遣構・遺物が数多く検出されていることから、古墳時代後期後半以降、この地に古墳を造営しうる有力集団が居住していたであろうことは想像に難くない。踏査により確認されている新堂古墳群等がこれらの集団の墓域である可能性が高い。

この様な背景の中で飛鳥時代に至ると新堂廃寺が創建され、近接する丘陵上にお亀石古墳が築かれることとなる。お亀石古墳の北東約400mにはお亀石古墳と同様に横口式石櫛を内部主体とする宮前山1号墳（8）をはじめとして、無袖の小石室墳と考えられる宮前山3・4号墳（9・10）が確認されている<sup>(註5)</sup>。またお亀石古墳の立地する丘陵の北西部では、かつて埠の小片が採取されており<sup>(註6)</sup>、現在中野古墳推定地（11）として指定されている。これらの状況から、この周辺が飛鳥時代の墳墓の造営地として選定されていたことが伺われる。

富田林市域以外では、北方では同じ羽曳野丘陵上に、羽曳野市ヒチンジョ池西古墳<sup>(註7)</sup>、小口山古墳<sup>(註8)</sup>、徳楽山古墳<sup>(註9)</sup>などの横口式石槨墳が確認されている。石川東岸に目を移すと、羽曳野市鉢伏山周辺には觀音塚古墳<sup>(註10)</sup>、觀音塚上古墳<sup>(註11)</sup>、觀音塚西古墳<sup>(註12)</sup>、鉢伏山南峰古墳<sup>(註13)</sup>、鉢伏山西峰古墳<sup>(註14)</sup>、オウコ8号墳<sup>(註15)</sup>などが、また太子町磯長谷古墳群には、御嶽山古墳、陀寺古墳、松井塚古墳<sup>(註16)</sup>など横口式石槨墳が集中して存在することが知られている。いずれの地も渡来系氏族との関係が指摘されている地域である。

新堂磨寺跡、オガソジ池瓦窯跡、お龜石古墳も、この様な南河内の地域性の一端を示しているものとして把握する必要があるであろう。

#### 【註】

- 1) 藤直幹・井上馨・北野耕平(1964)「第三章 真名井古墳」、大阪大学文学部国史研究室(編)『河内における古墳の調査』(大阪大学文学部国史研究室研究報告 第一冊)所収、京都。
- 2) 井藤徹(1966)、大阪府教育委員会(編)『鍋塚古墳発掘調査概要』(大阪府文化財調査概要1966)所収、大阪。
- 3) 北野耕平(1985)「第五章 古墳時代の富田林」、富田林市史編集委員会(編)『富田林市史』第1巻所収、富田林(大阪)。
- 4) 前掲註3。
- 5) 前掲註3。
- 6) 前掲註3。
- 7) 北野耕平(1994)「ヒチンジョ池西古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 8) 北野耕平(1994)「小口山古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 9) 北野耕平(1994)「徳楽山古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 10) 笠井敏光(1994)「觀音塚古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 11) 笠井敏光(1994)「觀音塚上古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 12) 笠井敏光(1994)「觀音塚西古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 13) 北野耕平(1994)「鉢伏山南峰古墳」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 14) 伊藤聖浩(1994)「オウコ古墳群」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 15) 笠井敏光(1994)「オウコ古墳群」、羽曳野市市史編纂委員会(編)『羽曳野市史』第3巻所収、羽曳野(大阪)。
- 16) 上野勝巳(1978)『太子町の古墳墓—磯長谷古墳群—』、太子(大阪)。

## II 調査に至る経過(第2図 図版1上)

お龜石古墳は、今まで多くの先駆者によって研究対象として採り上げられてきた。考古学史的には、大正2年に梅原末治氏によって、「~此宮村の南々西約七町の山中に一大石槨棺あり、俗にお龜石と稱す、形式河内式の特徴を有するものにして其の槨の奥に棺を造り附けあるは飛鳥の觀音塚中の



第1図 お龜石古墳周辺遺跡分布図

1. お龜石古墳
2. 新堂庵寺跡
3. オガジ池瓦窯跡
4. 鍋塚古墳※
5. 宮神社裏山古墳群
6. 真名井古墳※
7. 宮前山1号墳※
8. 宮前山2号墳※
9. 宮前山3号墳※
10. 宮前山4号墳※
11. 中野古墳推定地
12. 新堂北遺跡
13. 新堂古墳群
14. 新堂遺跡
15. 新堂南遺跡
16. 六反池古墳
17. 中野遺跡
18. 中野北遺跡
19. 中野西遺跡
20. 喜志城跡
21. 桜井遺跡
22. 栗ヶ池遺跡
23. 栗ヶ池西遺跡
24. 喜志西遺跡
25. 桜井北遺跡

※は消滅したもの

一切石石櫛及春日の切石石櫛に似たるも、奥にある石棺そのものは之と異なり、彼の輕墓淺野氏所有の石棺徳樂山石棺、山田磨の墳等に似て、正に兩者の中間に位せり、たゞ凡てと異なる點は棺に把手を有する事なりとす、其他此種の石棺の横口に入るべき蓋の現存せる事又珍とすべし、～」と紹介されているものがもっとも早いものである（註<sup>1</sup>）。その直後に梅原氏と共に当古墳を訪れた高橋健自氏により、同年『考古学雑誌』上に「河内に於ける一種の古墳」という題目で現在のいわゆる横口式石櫛の研究が行われることとなる（註<sup>2</sup>）。この論考は、お亀石古墳も含めて河内に分布する横口式石櫛を対象に、その形態的な特徴と時期的な考察までを行っており、横口式石櫛研究の嚆矢となるものであった。

その後、1960年には、大阪府教育委員会によって新堂廃寺と共にお亀石古墳の発掘調査が行われた（註<sup>3</sup>）。この調査により、石櫛として用いられている家形石棺の周囲、東・北・西各側に「コ」の字形に平瓦を積み上げて護壁を構築していたことが確認された。平瓦によるこのような構造は、我が国ではお亀石古墳以外では未だ確認されておらず、飛鳥時代の古墳を考察する上で非常に重要な資料を与えるものとなった。また、その瓦が新堂廃寺跡から出土しているものと類似していることから、新堂廃寺とお亀石古墳が有意に関連するという認識、換言すると、お亀石古墳の被葬者が新堂廃寺の檀越であるという認識を生むこととなった（註<sup>4</sup>）。

この大阪府教育委員会による調査は古墳の主体部のみにとどめたため、墳丘に関しては現在まで調査が行われることはなく、現況地形から直径約15m、高さ約3mの円墳と推測されてきた（註<sup>5</sup>）。

1997年、富田林市教育委員会では新堂廃寺跡をはじめ寺院の屋瓦の焼成遺構であるオガソジ池瓦窯跡、お亀石古墳が近接して存在するこの地域を、全国的にも希有な歴史ゾーンと認識し、国の史跡として指定を受けることを目的とし、5ヵ年計画でその範囲を確定する調査計画を決定した。

1997年度に新堂廃寺等調査指導委員会が組織され、4年間をかけて新堂廃寺跡の範囲確認調査を実施した（註<sup>6</sup>）。調査計画最終年に当たる2001年度の調査では、墳丘規模、墳形が不明確であるお亀石古墳を対象とする範囲確認調査を行うこととなった。

## 【註】

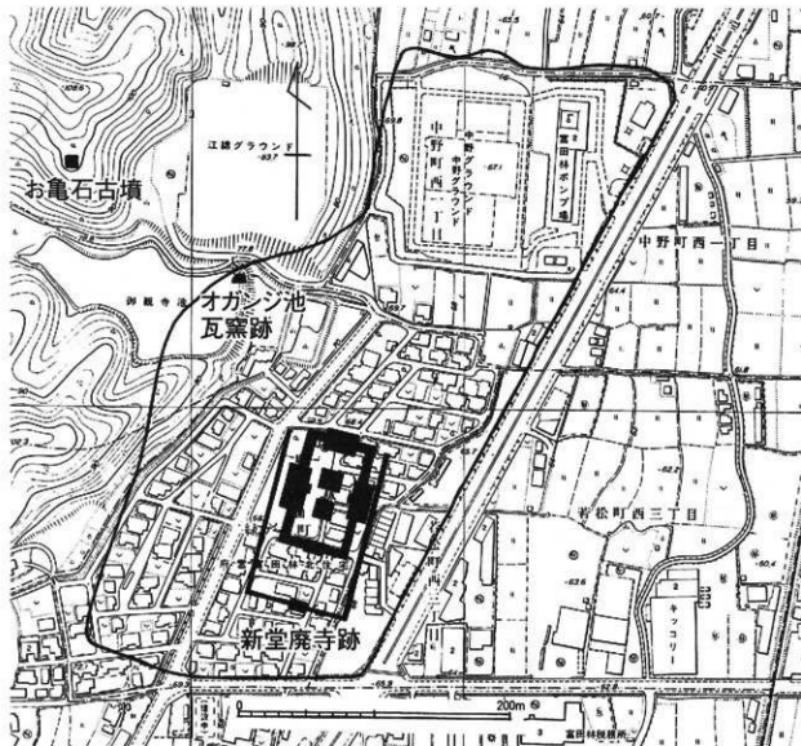
1) 梅原末治（1913）「南河内の三小群集墳」、『歴史地理』、第22卷第5号掲載。

雑誌の発行日は大正2年（1913）11月1日になっているが、文章末に（大正二年七月廿六日稿）と記されている。また（再記）として、「此稿を草し後、高橋、谷井兩先生初め諸先輩の一行に隨從して、南河内地方の諸遺跡踏査せり、～」となっている。註3論文でも、高橋氏は「私は本年八月谷井學士と共に本會々員梅原末治君の案内で數日間南河内地方の古墳を調査いたしました。」と記している。またこの時期には、喜田貞吉氏により南河内の横口式石櫛が紹介（喜田貞吉（1912）「南河内の珍しい石棺」、『歴史地理』、第19卷第3号掲載）されるなど、この時期に南河内の特異な形態の古墳が考古学上で大きな注目を浴びていたことが伺われる。

2) 高橋健自（1913）「河内に於ける一種の古墳」、『考古学雑誌』、第4卷第4号掲載。

3) 藤沢一夫（1961）「新堂廃寺とその性格」、大阪府教育委員会（編）『河内新堂・烏合寺跡の調査』（大阪府文化財調査報告第12輯）所収、大阪。昭和35年のお亀石古墳の発掘調査に関しては、正式な報告は刊行されておらず、上記の報告書にわずかに触れられているだけである。

- 4) 北野耕平 (1985)「お龜石古墳」、富田林市史編集委員会（編）『富田林市史』第1巻所収、富田林（大阪）。
- 5) 前掲註4。
- 6) 中辻亘・栗田薰 (1999)、富田林市教育委員会（編）『平成10年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告30)、富田林（大阪）。
- 栗田薰 (2000)「新堂廃寺」、富田林市教育委員会（編）『平成11年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告31)、富田林（大阪）。
- 栗田薰 (2001)、富田林市教育委員会（編）『平成12年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(富田林市埋蔵文化財調査報告32)、富田林（大阪）。



第2図 新堂廃寺跡・オガニ池瓦窯跡・お龜石古墳位置図

### III 調査区の設定（第3図 図版1下）

お亀石古墳は、羽曳野丘陵から東方に伸びる支脈上の富田林市大字中野に位置している。古墳はその支脈が南東に突出した尾根上に位置するが、尾根の頂部に築かれているわけではなく、さらに南に小さく延びる尾根の中腹、標高約97mの位置に築かれている。南東方向の平地部に位置する新堂庵寺との比高は約30mに及ぶ。現在は古墳上から東方の平地部が一望できるが、東側のグラウンドになっている位置には本来もう一つの南北方向の尾根が伸びており、古墳と平地部とをさえぎる地形となっている。また現在は御觀寺池という名称で溜め池になっているが、尾根の南側は旧来は西から東に流れる谷筋であったと考えられる。このように墳丘の南を谷筋とし、北側背後を含めて周囲を丘陵に囲まれる地形は、飛鳥時代の古墳の選定地としては他の地域にも見られる事であり、この時代の墳墓の景観として一つの特徴をなしている。

お亀石古墳の主体部は、石棺として用いられている家形石棺の主軸の方向と羨道の両側石の方向が不一致である。そこで今回の調査では、調査区の割付の便宜のためもあり、天井石上に基点を設けた。また羨道部西側側石が東側に比べて直線的に伸びることから、羨道部中央から西側側石に平行させる方向で南北方向に基点からの調査主軸を設定した。この軸は、国土座標第IV系座標北に対し、N22.5° Wを測る。

調査区設定前に現況地形を0.25m間隔のコンターラインで平板測量を行った。その結果、墳丘北半部ではコンターラインが直線的に走るのに対し、墳丘南半部では弧を描き円形に走ることが確認された。その状況下においては、お亀石古墳が方墳、円墳または多角形墳のいずれの可能性も考えられたため、基本的な調査区を、基点から放射線状に8カ所（第1～第8調査区）に設定した。

その中でも、現況測量で墳丘の残りがよいと判断した北西部分に関しては、墳形を確定しうる地点と考え、調査範囲を広く設定した（第2調査区）。また、墳丘南西部では、現況測量で台形状の高まりが南西方向に伸びていることが確認された。そのため、南西部の調査区を南東方向に90度屈曲させ、台形上の高まりを直交する形の調査区を設定した（第4調査区）。

以上の8カ所の調査区を調査した結果、墳丘の南限に関して良好な成果を得ることができなかつたため、羨道開口部の南側に、東西方向で東側を北にし字状に曲げた調査区を設定し、第9調査区とした。

### IV 調査成果

#### 1 第1調査区（第4図 図版3上）

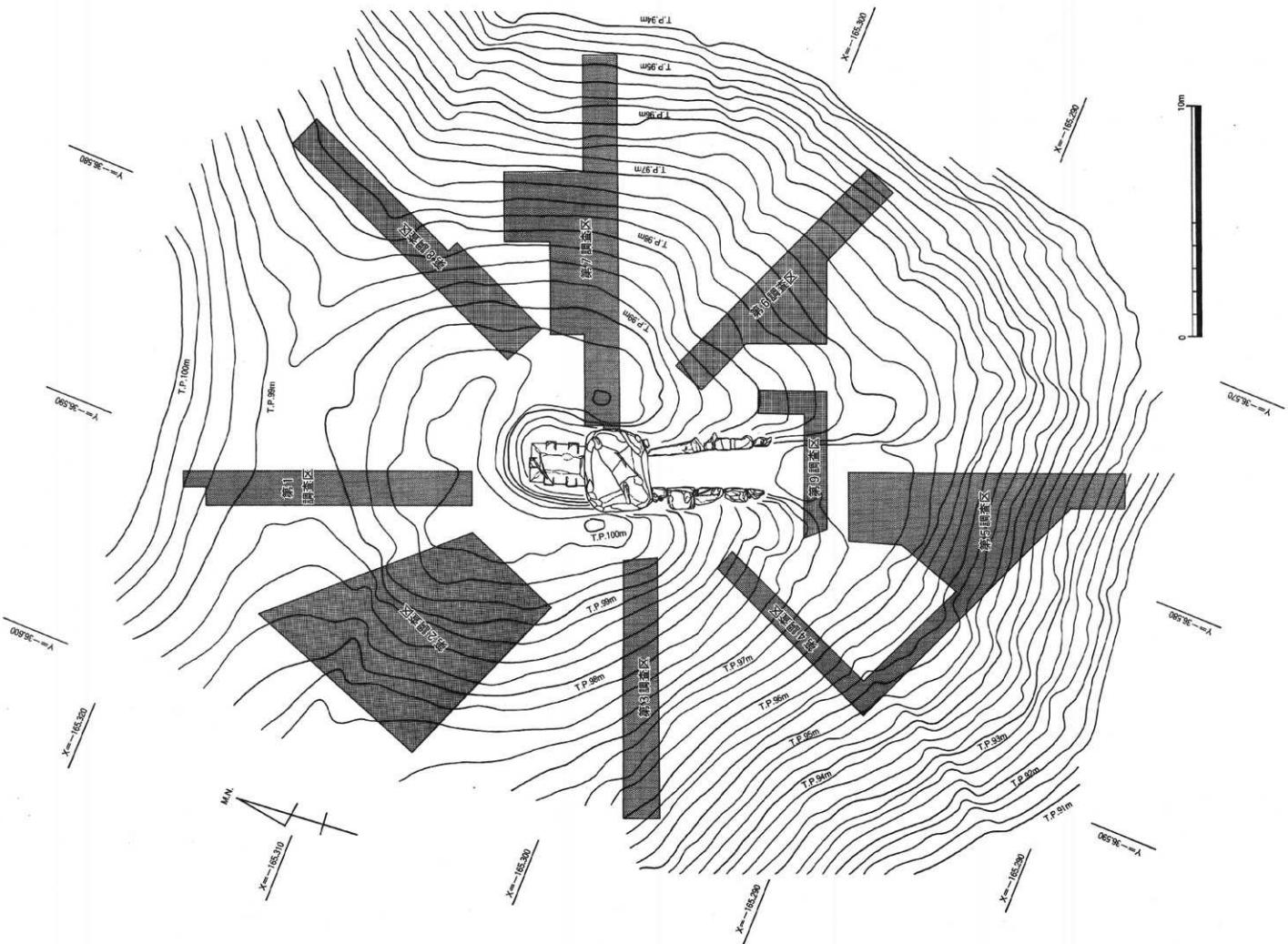
調査主軸の北側、基点から6.5m地点から、北に13m、幅1.5mでトレンチを設定した。ただし、調査区北端1mについては、樹木の関係で調査区幅を東側0.75mに狭めた。

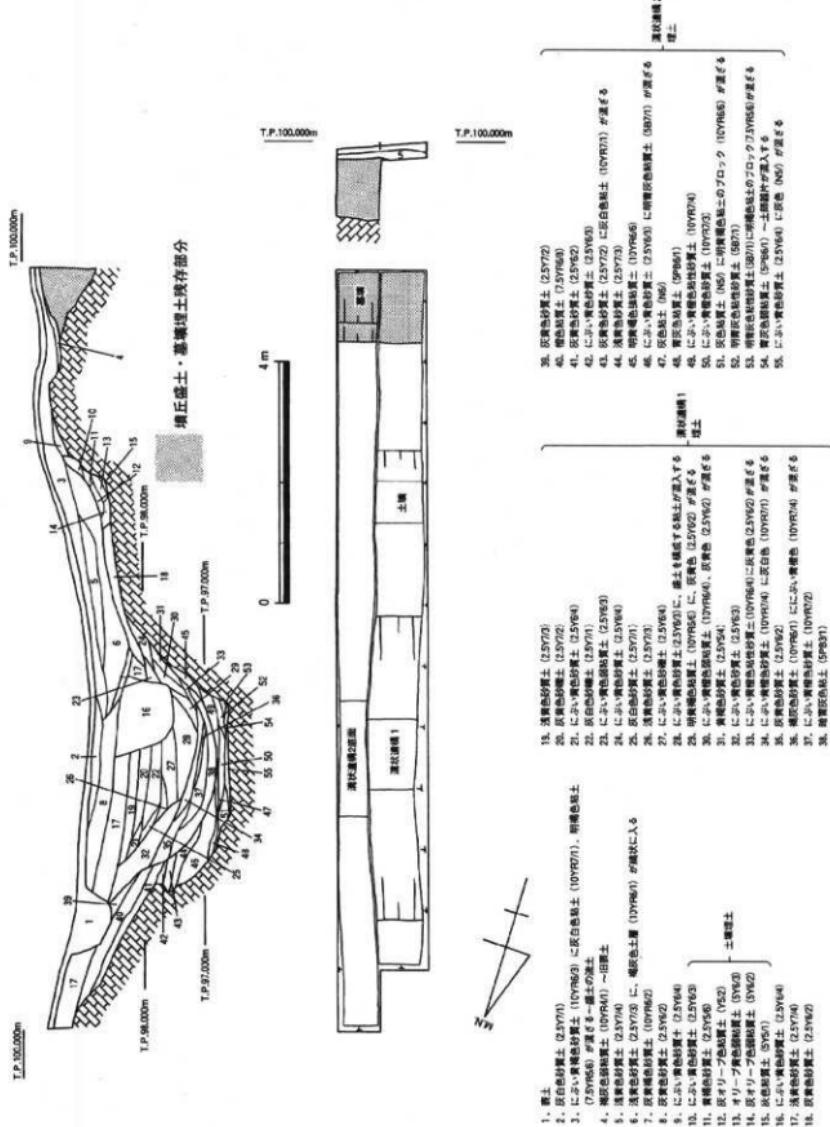
この調査区において検出された遺構としては、墓壙・土壤・溝状遺構1・溝状遺構2がある。

##### （1）墓壙

基点から北に7.5m地点から、南側に向かって地山が掘り込まれ、墓壙が形成されていることを確認した。墓壙は、北側掘方から傾斜角約15度でゆるやかに掘り込まれるが、0.5m地点から傾斜角35度とやや傾斜を強める。しかしながら、この傾斜角では主体部の北端の基底面にまでいたらな

第3図 おれ石古墳現況測量図・調査区配置図





第4図 第1調査区平面図・断面図

いため、南側でさらに傾斜を強めて掘り込まれているものと推定される。

墓壙の埋土には、地山を構成している土が用いられており、墳丘形成、もしくは墓壙を掘削する際に排出した土をそのまま利用したものと考えられる。また、墓壙上には墳丘盛土が薄く残存していた。土層断面を観察すると、墓壙埋土および盛土には厚みで0.05mから0.1mの単位が確認できたが、この調査区では墓壙の埋め戻し終了から盛土形成に移る作業工程の変化は確認できなかった。

なお、墓壙内埋土および盛土内からは遺物は出土していない。

## (2) 土壙

基点から北に10m地点で、土壤状の掘り込みを確認した。この掘り込みは、北側の掘方を除くと上半部と南側の大半が流失している。埋土内から寛永通宝とともに釘状鉄製品、鎌状鉄製品が出土している。木棺を埋葬した近世墓であった可能性が高い。

## (3) 溝状遺構1

基点から北に12.1m地点から、南に幅約4m、深さ約1.5mの溝状遺構が検出された。断面形態は幅広のU字形である。底面の標高は、T.P.96.8mを測る。この溝状遺構埋土の最下層である暗青灰色粘土内（第4図の第38層）からは瓦片1点が出土している。その直上に堆積するにぶい黄橙色砂質土（第4図の第37層）からは、14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる土師器、瓦質土器、平瓦などと共に、古墳の閉塞石と考えられる川原石が出土している。

なお、断面観察から、この溝状遺構が長期間にわたり機能していたことが伺われる。

## (4) 溝状遺構2

溝状遺構1を検出した時点では、明らかにその遺構が南側肩部においては地山から掘り込みこまれており、また北側肩部においても地山状の土を掘り込んで形成されていることから、古墳築造時の丘陵から墳丘を切り離す区画溝が中世期に掘り直されてしまったものと判断した。しかしながら、確認のため調査区東半部を断ち割ったところ、溝状遺構1の下方において、さらに溝状の掘り込みが確認された。

この溝状遺構は、底面が平坦であり、南北幅は約2mである。基点から溝底南端までの距離は13.6mであり、底面の標高は、T.P.96.6mを測る。南側は溝状遺構1に削られているため、古墳築造当初の形態はとどめていない。北側の溝の肩部は基点から北に18.7m地点に当たり、掘り込み途中から傾斜を強める2段掘り状を呈している。当初地山と認識していた土に関しては、丘陵北側から溝状遺構2に流入した土であることが判明した。この層序により、溝状遺構2がある程度埋没した後に、溝状遺構1が掘り込まれていることが確認された。

出土遺物としては、遺構最下層から土師器片、須恵器片が出土している。いずれも小片であり、器形は不明である。

以上の成果から、この溝状遺構2が古墳築造時の北側丘陵と墳丘とを切り離す区画溝であると判断した。したがって、溝底の南側から墳丘へと立ち上がる傾斜角は、約60度の急傾斜がもとめられる。

## 2 第2調査区（第5図 図版3下）

基点から北西方向に、南東辺4.8m、南西辺9m、北西辺9m、北東辺9mの不整形な台形の調査区を設定した。この調査区は、現況地形測量時に墳丘がもっとも残存しているであろうと判断した地点に当たるため、他の調査区よりも調査範囲を広く求めた。

この調査区では、墓壙、溝状遺構、中世の遺構面が検出された。

### （1）墓壙

調査区南東部端において、地山を掘り込む墓壙が確認された。墓壙上には盛土がわずかに残存しており、確認のため調査区南東部で断ち割り調査を行うにとどめたため、墓壙の正確な輪郭は不明である。しかしながら、傾斜の方向としては北西側から南東に向かって掘り込まれており、第1調査区との関係からみると、墓壙は明確な方形などにはならず、楕円形もしくは隅丸方形状になるものと推測される。

墓壙埋土および盛土に用いられている土の性質は第1調査区のものと同様であるが、調査区南西部の盛土の状況を観察すると、粘土ブロックを多量に含む土が用いられている。あるいは、土留めなどの役割を果たしている部分であったのかもしれない。

なお、墓壙内埋土、盛土内からは遺物は出土していない。

### （2）溝状遺構

調査区北部で、東西方向に走る溝状遺構が確認された。地山を断面U字形に掘り込んだものであり、南側地山面掘方から溝底までの深さは1.1m、底面の標高はT.P.96.9mを測る。北側の掘方に關しては、調査範囲外であったため確認できなかった。最下層には褐色粘土（第5図の第22層）が堆積している。この堆積土中から、瓦片1点が出土している。この遺構からは他に遺物は出土していない。なお、この溝底の下部は地山であることを確認した。

当調査区では、この溝状遺構が第1調査区の溝状遺構1・2のいずれに連結するものであるかが問題となる。溝底面の標高で見ると、第1調査区溝状遺構1の底面がT.P.96.8mであることからこの溝の延長とも見なされる。しかしながら、調査区北西壁の土層断面を観察すると、当調査区西部に広がる中世遺構面の埋土が、溝状遺構埋土第36~38、19層を切る形で堆積している。したがって、北東壁断面では明確な溝の掘り直しは観察できないものの、第14層上面、または下面を底とする掘り直しの溝が第1調査区の溝状遺構1に対応し、以下の堆積部分が溝状遺構2に対応する可能性も考えられる。

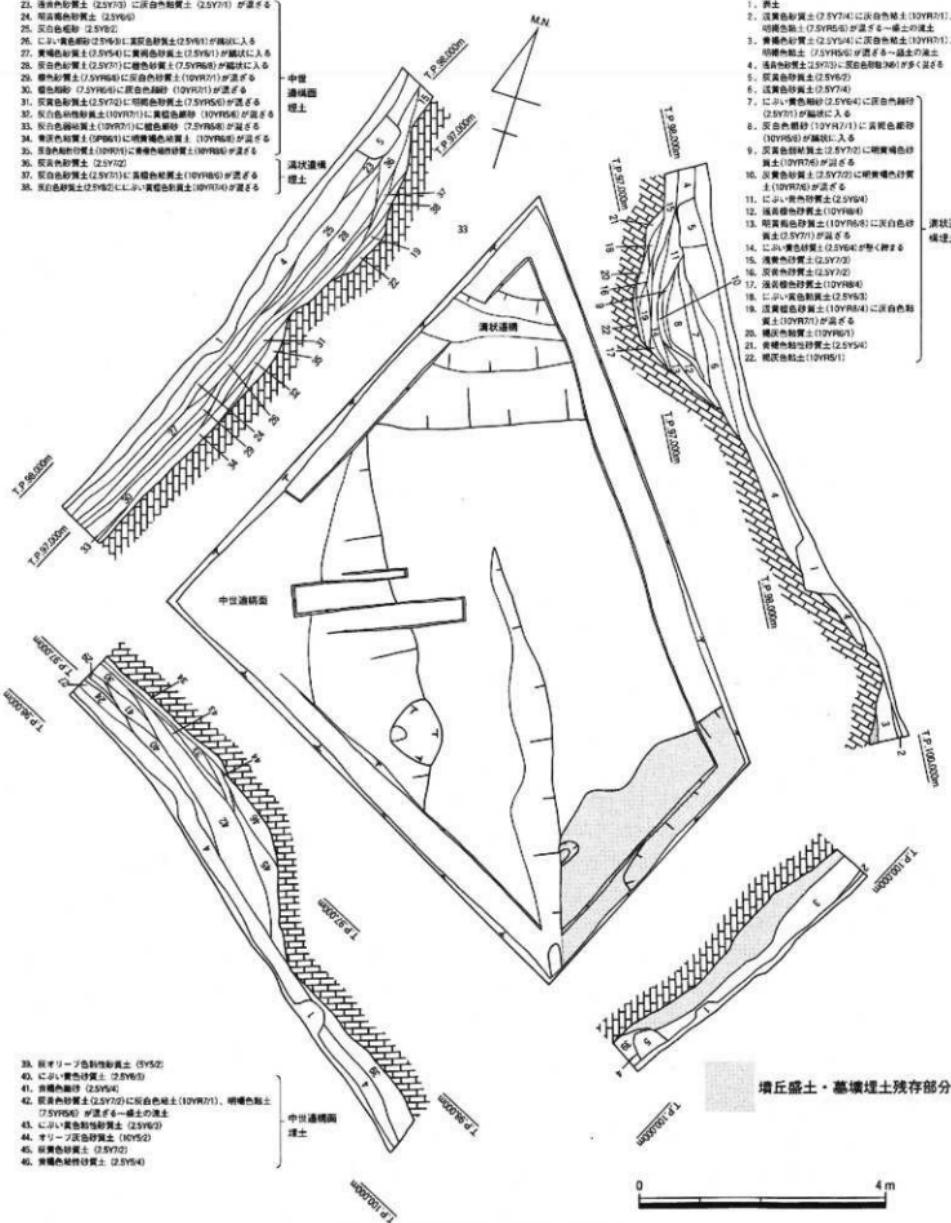
今回の調査ではいずれとも断定しがたく、今後の調査・検討を待たねばならない。

### （3）中世遺構面

調査区西部で、地山が急斜面でカットされ、平坦面が形成されている部分が確認された。地山は南東-北西方向に直線的に削られており、底面にはビット等の明確な遺構は確認されなかつもの、瓦質の羽釜、瓦器碗、土師器の高杯脚部片、古墳の閉塞石と考えられる川原石などが散乱する状況で検出された。これらの内中世遺物に関しては、第1調査区の溝状遺構1出土遺物と明確な時

23. 黄褐色砂質土 (2SY7/3) に灰白色砂質土 (2SY7/1) が混ざる  
 24. 灰白色砂質土 (2SY7/6)  
 25. 灰色細粒土 (2SY9/2)  
 26. に少し黄色細粒土 (2SY9/1) に黒褐色細粒土 (2SY8/1) が混ざりに入る  
 27. 黄褐色砂質土 (2SY7/3) に灰白色砂質土 (2SY7/1) が混ざりに入る  
 28. 灰白色砂質土 (2SY7/6) に褐色砂質土 (2SY8/6) が混ざりに入る  
 29. 褐色砂質土 (2SY9/6) に灰白色砂質土 (2SY7/1) が混ざる  
 30. 墓地跡地 (2SY8/6) に灰白色砂質土 (1SY9/1) が混ざる  
 31. 灰褐色砂質土 (2SY7/2) に明褐色砂質土 (2SY9/6) が混ざる  
 32. 灰白色砂質土 (2SY7/1) に褐色砂質土 (2SY8/1) が混ざる  
 33. 灰白色砂質土 (2SY7/1) に褐色砂質土 (2SY8/1) が混ざる  
 34. 灰白色砂質土 (2SY9/1) に褐色砂質土 (2SY8/1) が混ざる  
 35. 灰褐色砂質土 (2SY9/1) に褐色砂質土 (2SY8/1) が混ざる  
 36. 灰褐色砂質土 (2SY7/2)  
 37. 灰白色砂質土 (2SY7/3) に高褐色細粒土 (1SY9/1) が混ざる  
 38. 灰白色砂質土 (2SY7/6) に少し黄褐色砂質土 (2SY7/4) が混ざる

1. 黄土
2. 黄褐色砂質土 (2SY7/4) に灰白色砂質土 (2SY7/1)
3. 明褐色砂質土 (2SY8/6) が混ざる一層の砂質土
4. 黄褐色砂質土 (2SY7/3) に灰白色砂質土 (2SY7/1) が混ざる
5. 灰白色砂質土 (2SY9/2)
6. 這葉青色砂質土 (2SY7/4)
7. に少し黄褐色砂質土 (2SY6/4) に灰白色砂質土 (2SY7/1)
8. 黄褐色砂質土 (2SY9/2) に灰白色砂質土 (1SY9/5) が混ざる
9. 灰白色砂質土 (2SY7/6) に明褐色砂質土 (2SY8/2) が混ざる
10. 這葉青色砂質土 (2SY7/2) に明褐色砂質土 (2SY8/1) が混ざる
11. に少し黄褐色砂質土 (2SY8/4)
12. 這葉青色砂質土 (2SY7/2) が混ざる
13. 這葉青色砂質土 (2SY7/1) に灰白色砂質土 (2SY7/6) が混ざる
14. に少し黄褐色砂質土 (2SY6/4) が混入する
15. 這葉青色砂質土 (2SY7/2)
16. 灰白色砂質土 (2SY7/2)
17. 這葉青色砂質土 (1SY9/1)
18. 灰白色砂質土 (2SY7/1) に灰白色砂質土 (2SY7/6) が混ざる
19. 這葉青色砂質土 (2SY7/1) に灰白色砂質土 (2SY7/4) が混ざる
20. 黄褐色砂質土 (2SY7/3)
21. 黄褐色砂質土 (2SY7/4)
22. 灰白色砂質土 (1SY9/1)

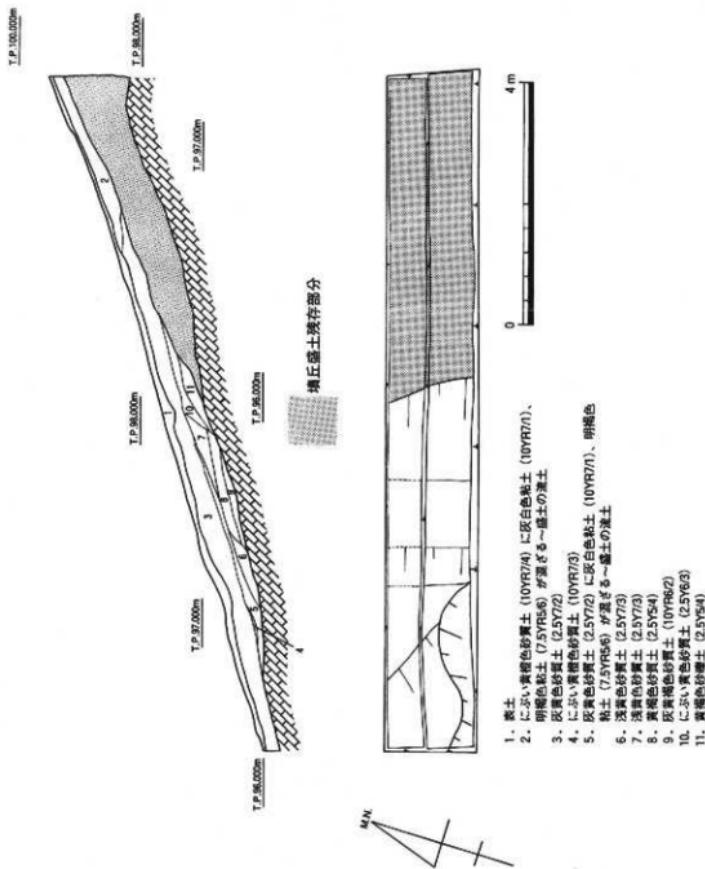


第5図 第2調査区平面図・断面図

期差は見出せない。また、この遺構の底面の下部は地山であることを確認した。

### 3 第3調査区（第6図 図版4上）

基点から調査主軸に直交させて西に4m地点から、幅1.5m、長さ11mの調査区を設定した。この調査区は、今回の調査でもっとも良好に墳丘盛土が残存していた部分である。盛土西端部以西では、地山は傾斜変換を行なながら西に降下しているが、調査区西端部で南側にやや急な落ち込みを



第6図 第3調査区平面図・断面図

みせている。これは、遺構と言うよりは、現況の地形自体がこの地点で南側に傾斜を強めていることを反映しているものと思われる。

#### (1) 墳丘盛土 (第7図 図版4下)

盛土は、調査区東端、基点より西に4m地点から、基点より西に9.55mまで残存していた。現状では、調査区東端で上端がT.P.99.3m、下端がT.P.98.2mの厚みで残存している。また盛土西端ではT.P.96.98mを測る。傾斜角は約20度～25度である。

断面観察のため、調査区の北半部を断ち割った結果、盛土の構築過程が確認できた。盛土は、T.P.97.8m付近を境に、以下は大きな単位、以上は細かな単位の土を積み上げて構築されている。盛土には、他の調査区と同様に丘陵の地山掘削土を利用しているが、砂質土と粘土を意識的に使い分けている。このことは、T.P.98.3m付近、すなわち調査区内で地山が頂点に達する高さで顯著に観察できる。この高さで盛土は粘土ブロック（灰白色粘土10YR 7/1、明褐色粘土7.5YR 5/6）を多量に含んだ土で水平に形成されている。また、その上面に炭化物や赤褐色を帯びた花崗岩質の小礫が堆積していることが確認された<sup>(註1)</sup>。このことから、墳丘盛土はひとまずこの高さまで積み上げられ、何らかの行為が行われた後、さらに積み上げられていく状況が復元できる。この面より上位の盛土にも、高さ0.2m～0.3mの間隔で粘土ブロックを多く含んだ土が水平に積まれている状況が確認できるため、一定間隔で盛土を安定させる工法が用いられたことが判明した。

地山と盛土の間には、旧表土等の間層が確認されないため、墳丘西側では墳丘築造時にある程度丘陵を削り取り、地山面を露出させた後に盛土が行われたことが分かる。

なお、盛土内からは、上記の炭化物、小礫以外には遺物は出土していない。

#### 4 第4調査区 (第8図 図版5上)

基点から調査主軸に対して南西に45度の方向で6mの地点から、幅1m、長さ9mの調査区を設定した。また、前述したように、墳丘南西部に伸びる突出部に直交する形で、調査区南西端部から南東方向に90度屈曲させ、幅1mの調査区を第5調査区に連結させた。

この調査区でも、一部に墳丘盛土が残存していることが確認された。

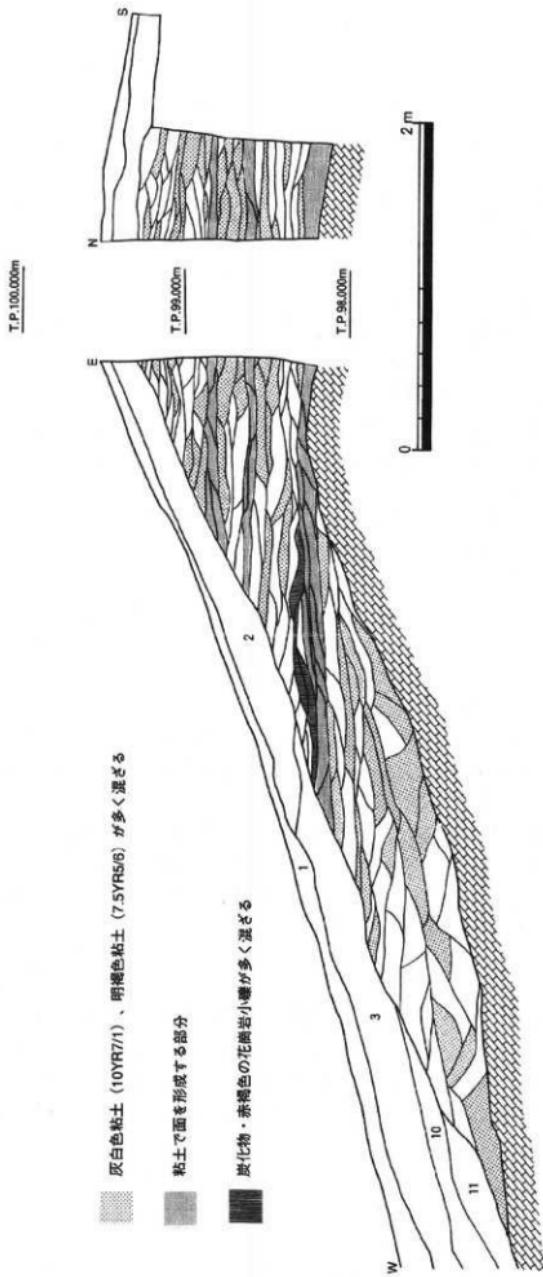
#### (1) 墳丘盛土

盛土は、基点より南西方向に6.8m地点（盛土上端T.P.97.2m）から、9.4m（T.P.96.5m）までの範囲で残存していた。その構築方法は、盛土の残存している北東端部で地山を0.25m程掘り下げ、以下は傾斜に沿う形でその間に盛土を行っている。この地山を掘り込んでの盛土構築は、後述する他の調査区でも見られることであるが、第3調査区では確認されていない。この工法の相違が何に起因するものであるかは不明であるが、お龜石古墳の墳丘裾部付近での盛土構築の一つの特徴となっている。

盛土を構成している土の性質は他の調査区でのものと同様であるが、単位的な特徴としては、比較的粘土が多く含まれている土が用いられている。

盛土内からは遺物は出土していない。

第7図 第3調査区北壁・東壁堆丘盛土断面図



## (2) 墳丘南西突出部

現況測量図作成時に確認された墳丘南西部の台形状突出部と墳丘との関係を明らかにするため、調査区を突出部に直交させる形で調査を行った。その結果、この高まりは盛土等によるものではなく、地山の両側を削り取って形成されていることが確認された。しかしながら、層位的な見地からの墳丘との関係はこの調査区では判明しなかったため、今後の調査の課題となる。

## (3) 川原石(閉塞石)群 (第9図 図版5上)

当調査区と第5調査区との間ににおいて、川原石が集中して検出された。これは調査当初、現況測量のための除草時に表土内から数個の川原石が露出していたため、調査範囲外の地区であったが、表土を除去する形で川原石の広がりを確認したものである。

その結果、漢道部南西側に集中して、10cm～50cm大の川原石が約100点検出された。これらの石に関しては、この様な検出状況下では断定はできないものの、お龜石古墳に用いられた閉塞石として解釈してもよいものと考える。

同種の川原石は、今回の調査において中世の遺構からも出土している。このことは、中世期にお龜石古墳が盗掘(墳丘の改変)を受けた際に、閉塞石が再利用された、もしくは混入した状況を示すものであろう。

なお、これらの石群は検出時にすでに不安定な状態であったため、写真撮影と図化を行った後、調査終了時に取り上げた。

## 5 第5調査区 (第8図 図版5下)

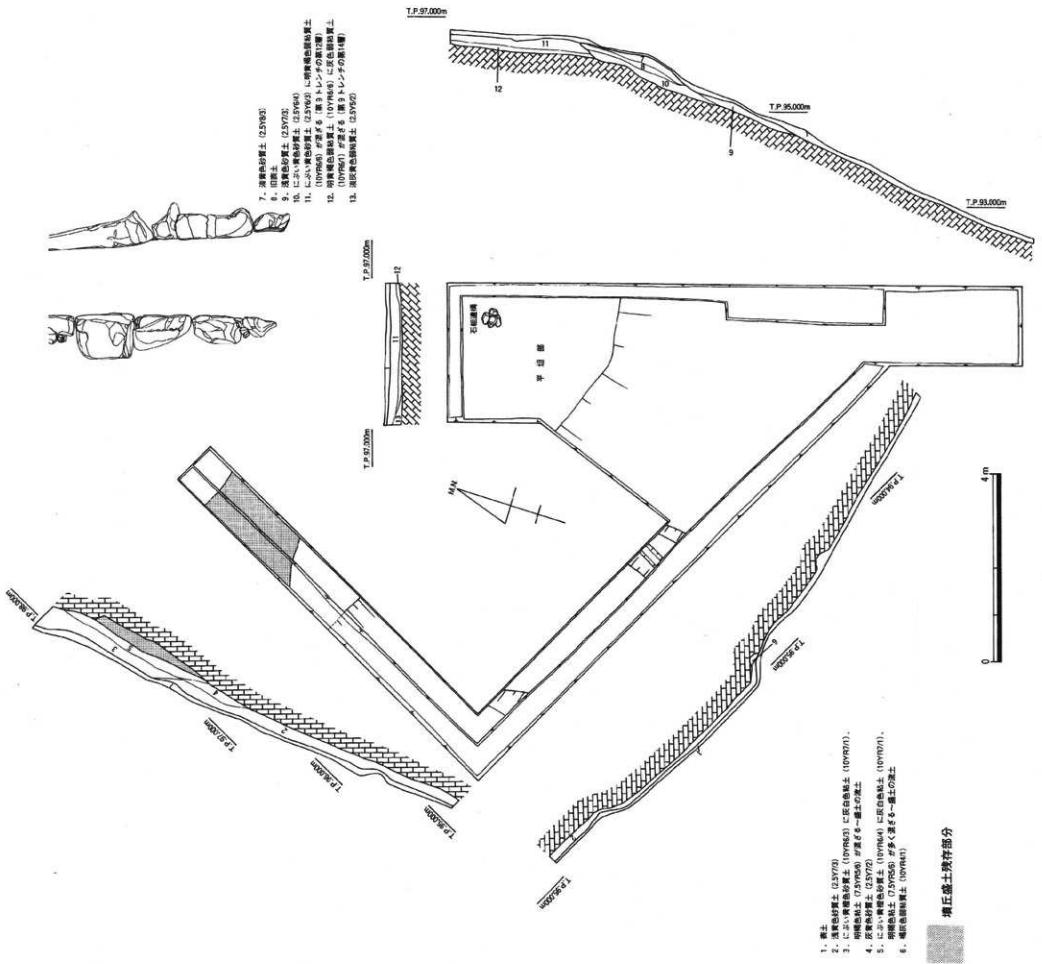
調査区設定時当初は、基点から調査主軸方向南に10m地点から、幅1.5m、長さ12.2mの南北方向の調査区であったが、調査の進行過程で西側に順次調査区を拡張していくこととなった。この調査区内では墳丘盛土は確認されなかった。

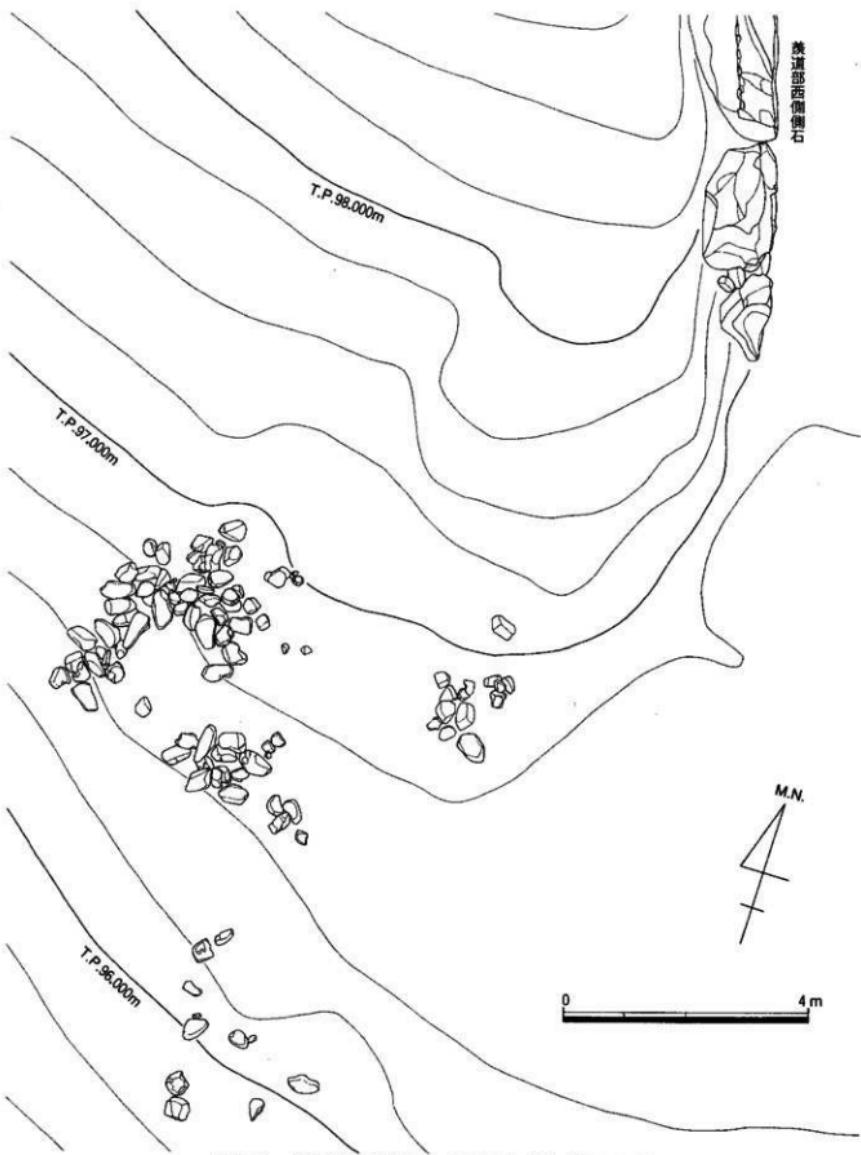
調査区北側では地山面がほぼ平坦に形成されており、標高はT.P.96.35mを測る。この平坦面は西側に向かって緩やかに弧を描く形で形成されているが、その平坦面の東側において川原石を5個用いた石組が検出された。平坦面以南では、地山は南方向に急傾斜で下っており、墳丘に伴う段状の施設等の人为的な成形が行われた痕跡は確認できなかった。

## (1) 石組遺構

20cm～30cm大の川原石を用いたもので、4個の石を円形に敷いた上に1個の石を乗せている状態で検出された。石を取り除いた結果、地山を薄く掘り込んだ内部から鉄釘が1本出土した。この遺構の性格および時期に関しては判断材料がないため明言できないが、用いられている川原石が古墳の閉塞石を転用しているものと考えられるため、他の調査区の状況を考えると中世期に構築された可能性が高いと考える。

第8図 第4調査区・第5調査区平面図・断面図





第9図 墓丘南西部川原石（閉塞石）検出状況平面図

## 6 第6調査区（第10図 図版6上）

基点から調査主軸に対して南東45度の方向に5mの地点から、幅1.5m、長さ12mの調査区を設定し、さらに墳丘南側の確認のために調査範囲を南に拡張した。この地区は現在の古墳の進入路となっており、現況測量時からも墳丘はかなり削平されていることが予想された。

調査の結果、調査区内北東部分は表土下が地山、もしくは間に薄く流土が入るだけであり、墳丘が良好に残っている状況ではなかったが、わずかに墳丘盛土の残存部分が確認できた。また、中世の遺構面も検出された。

### （1）墳丘盛土

調査区北東壁側を断面観察のために断ち割った結果、調査主軸から東に7.15m（T.P.97.5m）から9.3m（T.P.96.65m）の範囲で墳丘盛土が確認できた。この盛土は第4調査区の盛土と同様に地山を掘り込んだ上に構築されているが、現状で0.2mの段差をもって、階段状に2段に掘り込まれている。

また、南側に調査範囲を拡張した部分では、西側壁断面において、地山をカットした部分に盛土状の土を確認した。この土は、各調査区で確認されている盛土と土質的には同一のものであるが、締まりが弱く盛土単位も確認できないものである。ただし、最下層（地山直上）には炭化物と共にお亀石古墳淡道部床面に散かれているものと同様の4cm大の小蝶が混入していることが確認された。この様な状況は、隣接する第9トレンチ東側でも確認されており、厳密な意味で盛土として認識してよいのかは慎重であるべきだが、断面観察から、墳丘築造後に擾乱を受けた状況とも判断できないため、現段階では墳丘に関連するものと考えている。なお、地山面の標高はT.P.96.85mを測る。

### （2）中世遺構面

調査区南側拡張部において、上記の盛土状部分の南側を掘り込む遺構を確認した。この掘り込みの床面は平坦に形成されているが、第2調査区同様ピット等の遺構は検出されていない。床面からは中世の瓦質土器片、土器片と共に、土器高杯片が出土している。

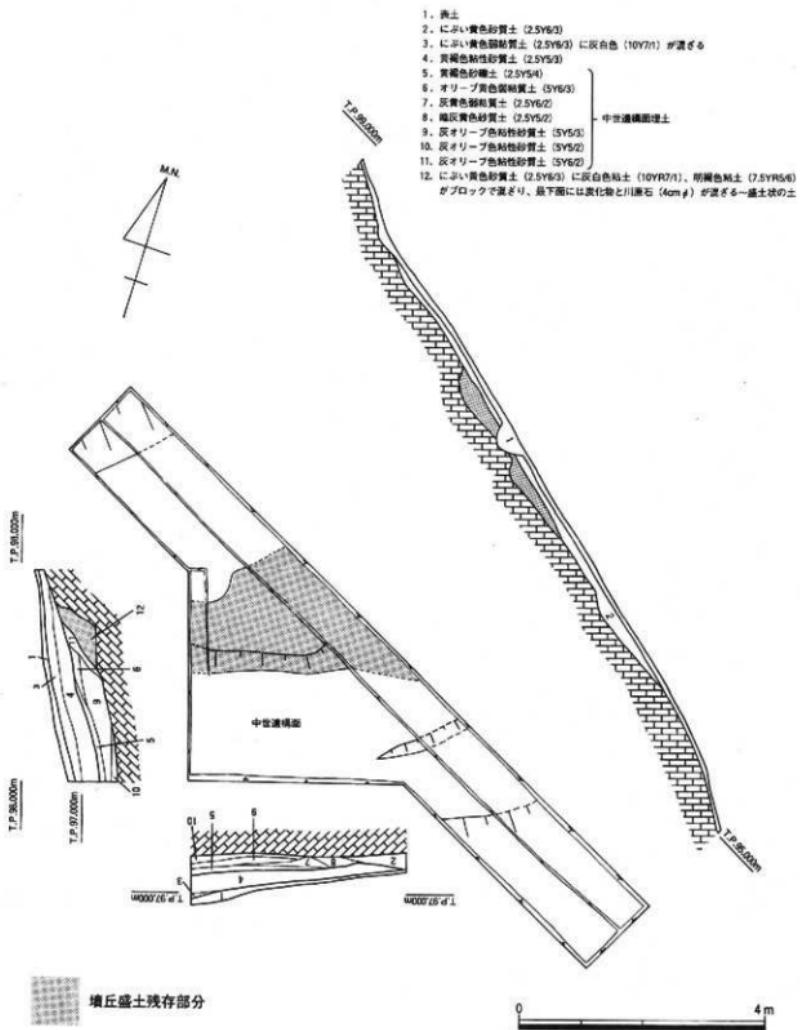
## 7 第7調査区（第11図）

基点から調査主軸に直交して東側に設定した調査区であり、幅1.5m、長さは基点から18mまでを範囲とした。調査過程で墳丘裾部が確認されたため、北側に大きく調査範囲を拡張することとなり、また墓壙の確認のため、西側は主体部淡道東側側石にまで調査区を伸ばすこととなった。

この調査区では、墓壙、墳丘盛土、土壙、中世の遺構面が確認された。

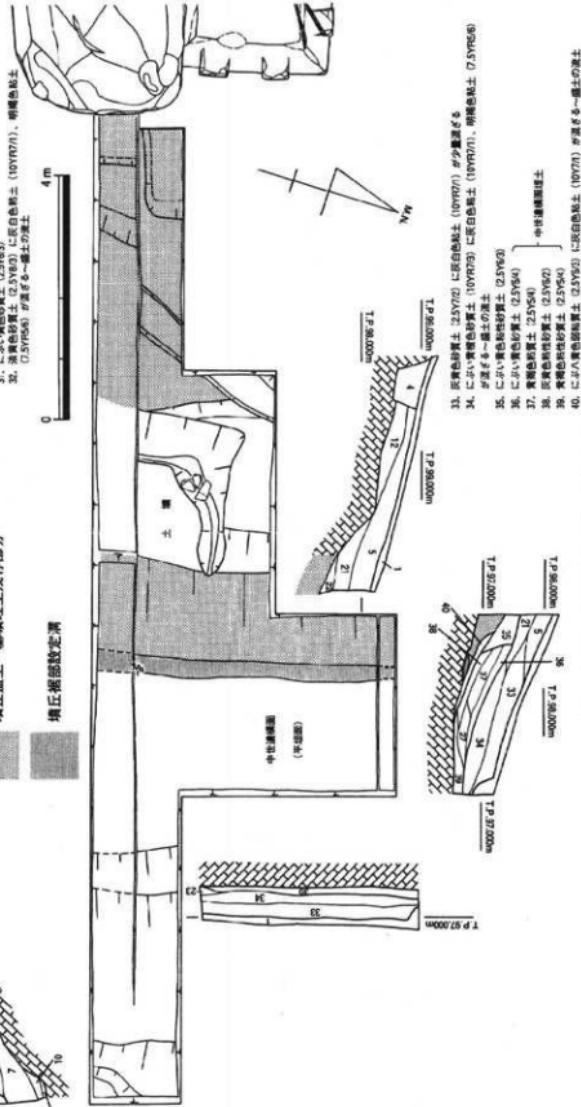
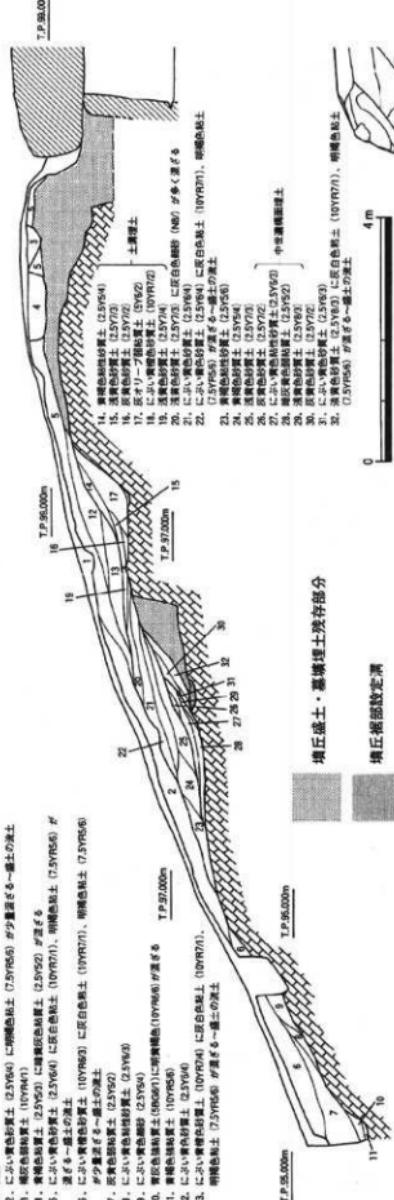
### （1）土壙（図版6下）

基点から東に6.5m地点で、地山を方形に掘り込んだ遺構が検出された。遺構の北および西壁に沿って、底幅0.06m～0.1m、深さ0.03m程の細く浅い溝が掘り込まれており、溝内からは鉄釘2本が出土した。また溝の北西角部を覆う形で、川原石2個と平瓦片1点が検出された。その他に遺構埋土内からは土器片、瓦器が出土しているが、いずれも小片であるため、時期的には中世期の遺構

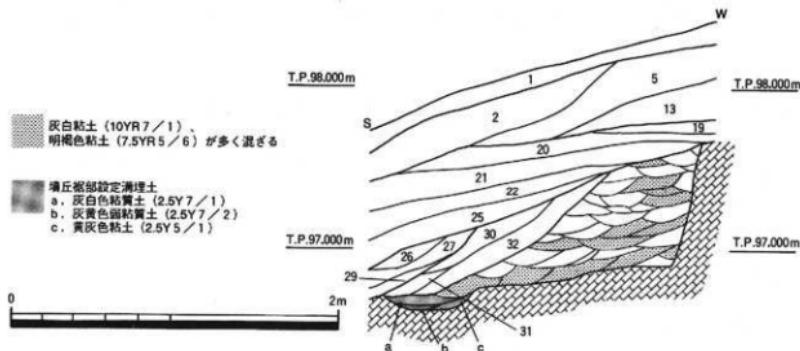


第10図 第6調査区平面図・断面図

1. 地上。
- 2.-3. 黄褐色砂質土 (2.5Y6/4) に淡褐色砂土 (7.5Y6/6) が少々混ざる一層の土。
4. 淡褐色砂質土 (10Y6/3) に淡褐色砂土 (2.5Y6/2) が少々混ざる。
5. 淡褐色砂質土 (2.5Y6/4) に白色粘土 (10Y7R/1)、淡褐色粘土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる一層の土。
6. 淡褐色砂質土 (10Y6/3) に淡褐色砂土 (10Y7R/1)、淡褐色砂土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる一層の土。
7. 淡褐色砂質土 (2.5Y6/4) に白色粘土 (10Y7R/1)、淡褐色砂土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる。
8. 淡褐色砂質土 (2.5Y6/4) に白色粘土 (10Y7R/1)、淡褐色砂土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる。
9. に少い白色粘土 (2.5Y6/3)。
10. 淡褐色砂質土 (10Y6/3) に淡褐色砂土 (10Y7R/1) が少々混ざる。
11. 淡褐色砂質土 (2.5Y6/4) に白色粘土 (10Y7R/1)、淡褐色砂土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる。
12. に少い白色粘土 (2.5Y6/3)。
13. 淡褐色砂質土 (2.5Y6/4) に白色粘土 (10Y7R/1)、淡褐色砂土 (7.5Y7R/6) が少々混ざる一層の土。



第11図 第7調査区平面図・断面図



第12図 第7調査区南壁填丘裾部盛土断面図

とするにとどめる。

### (2) 中世遺構面

基点から東に10.3m地点で、西側から流土を掘り込む形で東西幅約1.6m程の平坦面が形成されている状況が確認された。底面からは、14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる土師皿、瓦質の羽釜、平瓦などが出土している。この遺構面は、底面を地山としているが、第2調査区、第6調査区同様ピット等の遺構は確認されていない。

### (3) 填丘盛土（第12図 図版7）

調査区南壁側を断面観察のため断ち割ったところ、基点から東に9m地点で地山がほぼ垂直にカットされており、その部分に盛土が行われていることが確認できた。

現状で地山はT.P.97.65mの高さから0.85mの深さでカットされており、東に1.6mの範囲（基点から東に10.6m）に盛土が行われている。盛土東端部の高さはT.P.96.7mを測る。盛土の特徴としては、土質は他の調査区のものと同様であるが、底面に粘土ブロック（灰白色粘土10YR 7/1、明褐色粘土7.5YR 5/6）が多く含む土を用いていることが挙げられる。現状の盛土の傾斜角は、下半部で約25度、上半部で約45度を測る。

さらに、盛土の東端部下に、幅0.55m、深さ0.1mの地山に掘り込まれた浅い溝が検出された。溝の東側掘方は、基点から10.9mに位置する。この溝は、調査区内で南北方向に直線的に伸びており、北壁断面でも盛土の下に位置することが確認された。断面確認ではこの溝が盛土の土留め施設である可能性も考えられたため、発掘調査による填丘の破壊も考慮に入れたが、この溝の性格を明らかにするために盛土端部を掘削し、溝の調査を行った。その結果、この溝が素掘のものであり、溝内

に木杭のビット等の痕跡は残っていないことを確認した。溝内埋土は灰白色（2.5Y 7/1）を帶びており、地山の明黄褐色（7.5YR 5/6）とのコントラストが際立っている。断定はできないものであるが、この溝内埋土は自然堆積ではなく、人為的に土を選択して埋めている可能性も視野に入れておくべきだと考える。

以上の調査成果から墳丘盛土と溝との関係を見ると、この溝が墳丘裾部を設定しているものと認められる。また、その溝が南北方向に直線的に走ることで、お龜石古墳の墳丘が方形をなすことが明らかとなつた。

墳丘盛土の東側に関しては、中世期に構造面が形成されているものの、古墳築造時に盛土の東側地山が上昇していたとは考えがたい。現状で地山は基点より東に約14m地点から傾斜を強めて東方に降下している。したがって、お龜石古墳の墳丘東側には、最大で墳丘裾部から幅約3.5mの平坦面が形成されていたと考えたい。

出土遺物としては、墳丘盛土内からは遺物は出土していないが、墳丘設定溝の埋土からは縄文時代晚期の土器片が出土している。また、墳丘盛土上に堆積した流土内（第12図の第30～32層）から、須恵器壺の破片（第20図の4・5）が出土している。層位的に中世の掘り込みの及んでいない部分からの出土であり、古墳と関係する遺物である可能性が指摘できる。

#### （4）墓壙（第13図 図版8上）

調査区西部において、地山を掘り込む墓壙が確認された。地山は、基点から東に約4.5m、T.P.98.9m地点を頂点として、その地点から西に緩やかに傾斜している。調査主軸の西に対応する第3調査区の地山高（T.P.98.3m）との関係から見ると、この傾斜は墓壙の掘削によるものと言うよりは、丘陵の自然地形を反映している可能性が高い。しかしながら、第3調査区と同様に墳丘盛土と地山との間には間層が入っていないため、ある程度の整地が行われていたことは確実である。

確実な墓壙の掘削は、基点から東に2.6m、T.P.98.33m地点から行われている。この地点から、地山は約75度の急傾斜で西側に掘り込まれている。この掘方から約0.35m掘削した地点で、必要な情報は入手できたと判断し、また安全面の問題からも調査を中止した。

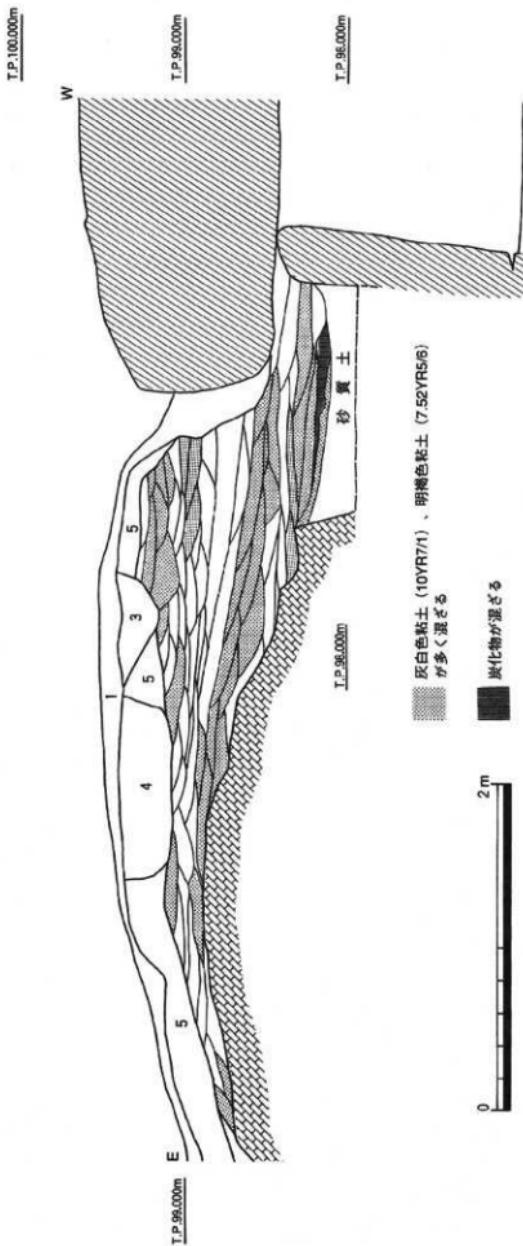
この墓壙の特徴としては、肩部の高さ（T.P.98.3m）が淡道部東側側石の上面高（T.P.98.42m）にほぼ一致していることである。このことは、換言すると天井石の下面の高さとはほぼ一致するということになる。また土層断面を観察すると、地山面の頂部から天井石の下面に向かって粘土ブロック（灰白色粘土10YR 7/1、明褐色粘土7.5YR 5/6）を多く含む盛土が西側に傾斜しながら一つの面を形成していることが確認できる。

墓壙内埋土に関しては、埋土が堅く締まり、単位がはっきりと確認できる部分と、粘土ブロックが若干混入するものの砂質で締まりが弱く、単位も確認できない部分とに分けられる。その境界は、標高でT.P.98.1mを測る。その境界の直上には、炭化物を多く含む層が検出された。第3調査区の盛土の安定面（T.P.98.3m）上にも同様の炭化物が検出されていることと共に注目される。

出土遺物としては、墳丘盛土内から花崗岩の小片が2点ほど出土している<sup>(註2)</sup>。

以上の成果は、墳丘および主体部の築造過程を復元する上で重要な部分となるため、『VIまとめ』の節で考察を行うことにする。

第13図 第7調査区南壁填丘盛土・墓壙埋土断面図



## 8 第8調査区（第14図 図版8下）

基点から北東方向に7mの地点から、幅1.5m、長さ13mの調査区を設定した。調査過程において、調査区南西部に深さ0.2m程の地山の薄い落ち込みが確認されたため、南東側に0.5m調査区を拡張した。しかしながら、この落ち込みに関しては、性格・掘削された時期共に不明である。

この調査区では、中世遺構面、墳丘盛土が確認された。

### （1）中世遺構面（第15図）

上記の落ち込みに流入した墳丘盛土の流土（第14図の第6層）を掘り込む形で、中世期の遺構面が形成されている。同様のものが第2調査区、第4調査区、第6調査区、第7調査区でも確認されているが、当調査区では、底面である地山を薄く掘り込む溝状遺構と土壤が検出された。層位的には溝状遺構が土壤を切る形で形成されている。

出土遺物としては、底面に散乱する状態で、瓦質の羽釜、土師質の擂鉢、瓦片などが出土している。他の調査区と同様、時期的には14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられるものである。

### （2）墳丘盛土（図版9上）

断面観察のため調査区北西壁側を断ち割ったところ、第7調査区同様に地山をカットした部分に残存する墳丘盛土を確認した。

現状の地山カット部分の肩部は、基点から北東に13.6m、調査主軸からの距離では東に9.6mに位置しており、T.P.97.9mを測る。その地点から、深さ約0.9mでカットされており、その部分を充填する形で盛土が行われている。現状で盛土は基点から北東に15.65m、調査主軸からの距離で11.05mまでの範囲に残存している。盛土下端部の高さは、T.P.96.9mを測る。盛土を構成する土質に関しては、他の調査区と同様であるが、特徴としては地山面付近に粘土ブロック（灰白色粘土10YR 7/1、明褐色粘土7.5YR 5/6）を多く含む土が用いられている。

また、第7調査区で確認した墳丘裾部設定溝をこの調査区でも検出した。墳丘盛土が流失しているため、検出時に溝の平面形態が確認できる状態であったが、一部盛土が溝の埋土に被さる部分も確認された。溝の東側掘方は、基点から北東に16m、調査主軸から東に11.3mに位置する。

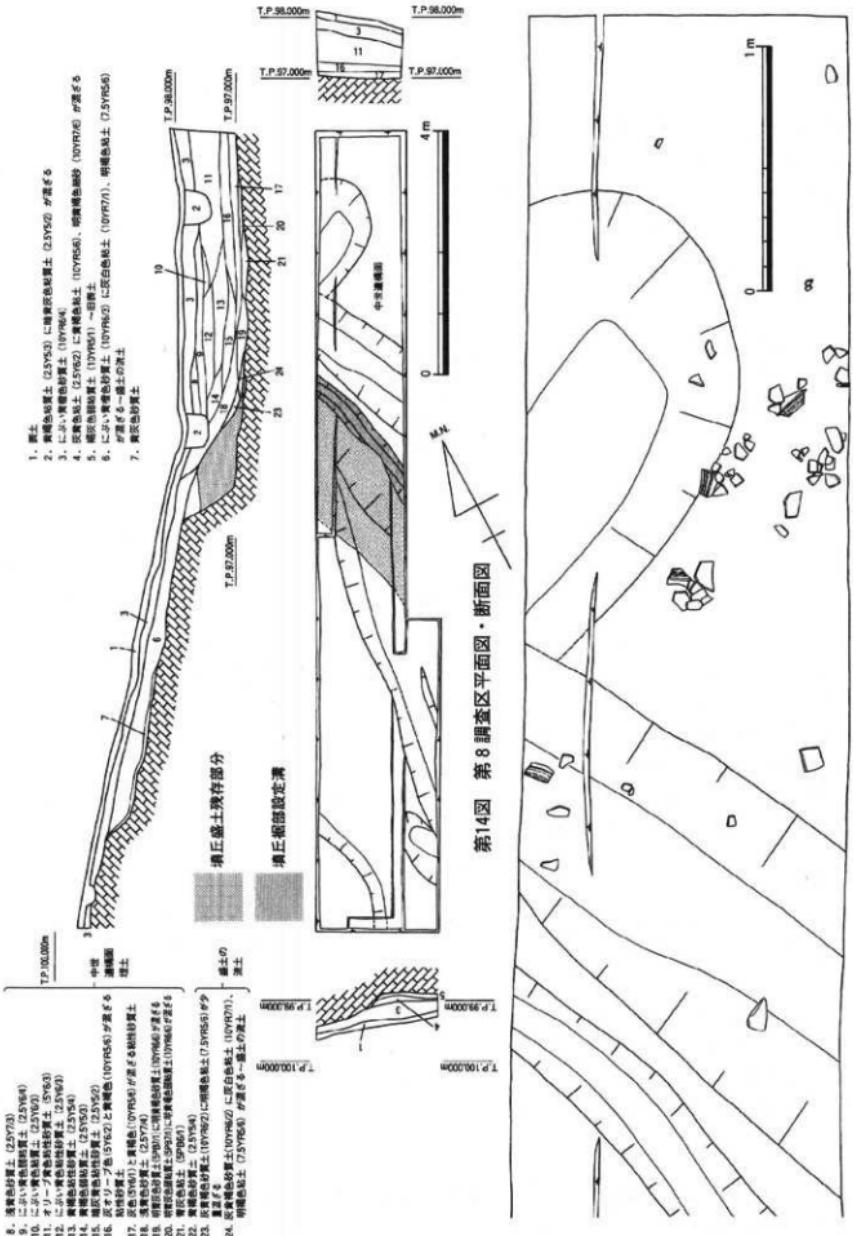
## 9 第9調査区（第16図 図版9下）

第1～8調査区の調査終了時点で、主に墳丘の東半部の成果からお龜石古墳が方墳であること、また墳丘の北限、東西幅に関してはある程度の復元が可能な状態に至った。しかしながら、墳丘の南側部分に関してはなお不明確な部分が残ったため、狭道部南側に幅1m、長さ6mの東西方向の調査区を設定し、さらに調査区東側を北に2m拡張させた。

この調査区では、中世遺構面と墳丘盛土と思われる部分が確認された。

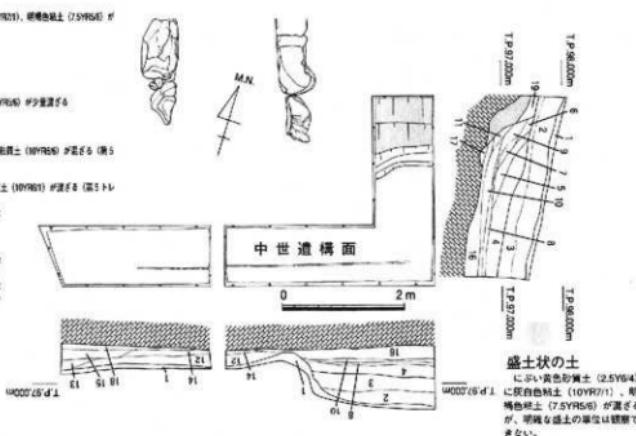
### （1）中世遺構面

第6調査区で確認された中世遺構面が狭道部南面にまで及んでいることが確認された。この遺構面は、調査区東側壁断面を観察すると、北側に堆積する盛土の流土層（第16図の第19層）と墳丘盛



第14図 第8調査区平面図・断面図

1. 黒土
2. 黄褐色砂質土 (2.5Y7/2) に灰白色粘土 (10YR7/1), 明褐色粘土 (7.5YR5/6) #深さ  
2mから底の土
3. 深褐色砂質土 (2.5Y7/2)
4. 灰オーブ色砂質土 (5Y5/2)
5. オリーブ色砂質粘土 (5Y6/2)
6. ハバウエイ砂質土 (2.5Y6/2)
7. 灰オーブ色砂質粘土 (7.5Y9/2)
8. 黄褐色砂質土 (2.5Y7/2) 明褐色粘土 (10YR6/6) #深さ達6m
9. ハバウエイ砂質土 (2.5Y6/2)
10. 灰白色砂質土 (2.5Y7/2)
11. オリーブ色砂質粘土 (5Y6/2)
12. ハバウエイ砂質土 (2.5Y7/2) 明褐色砂質粘土 (10YR6/6) #深さ (第5トレ  
ンションの底) 6m
13. 灰オーブ色砂質土 (2.5Y7/2)
14. 明褐色砂質粘土 (10YR6/6) ～灰褐色砂質土 (10YR6/6) #深さ (第5トレ  
ンションの底) 6m
15. 灰褐色砂質土 (2.5Y6/2) に明褐色砂質粘土  
(10YR6/6) #深さ 6m
16. 灰オーブ色砂質粘土 (2.5Y7/2)
17. 灰オーブ色砂質土 (2.5Y6/2)
18. 深褐色砂質土 (2.5Y7/2) に灰白色粘土  
#深さ (10YR6/6) #深さ 6m
19. 明褐色砂質土 (2.5Y6/2) に灰白色粘土  
(10YR7/1), 明褐色粘土 (7.5YR5/6) #深さ  
～底の土



第16図 第9調査区平面図・断面図

土と思われる土を切り込む形で形成されている。また、底面の北端には東西方向の細い溝状の掘り込みが検出された。検出時は第7・第8調査区の墳丘据部設定溝と同様の性格のものと考えたが、断面観察からこの溝状遺構が墳丘盛土の上から掘り込まれていることが確認された。また埋土の土質も他の調査区での中世遺構面埋土と類似するものである。

出土遺物としては、底面直上から瓦器皿、土器片、土器質の板状土製品などが出土している。瓦器皿の形態から、14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる。

## (2) 墳丘盛土

東側調査拡張区の北側で、墳丘盛土と思われる土が残存している部分を確認した。地山は調査区北端において急傾斜でカットされており、その部分に土を充填する形態はお龜石古墳の墳丘裾部における特徴と性格を一にしている。南端部は、T.P.96.75mを測る。しかしながらこの土は、質的には他の調査区の墳丘盛土と同様に粘土ブロック（灰白色粘土10YR 7/1、明褐色粘土7.5YR 5/6）が多量に含まれる土であるが、締まりが弱く、盛土の単位も確認できないものである。これらの状況は隣接する第6調査区の南側拡張区で検出されたものと類似しており、一連のものと思われる。現状では、古墳の墳丘に関連する施設と考えたい。

### 【註】

1) 兵庫県立権原考古学研究所の奥田尚氏から、この種の鉢物構成がお龜石古墳の箇道天井石のものと類似するという指摘を受けた。

2) この花崗岩の小片は、奥田尚氏により、漢道部側石に見られる花崗岩アブライト脈部分の破片ではないかという指摘を受けた。

## V 出土遺物

今回の調査では、検出した遺構内からは主に14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられる土器類が出土している。また、流土内からは飛鳥時代から中世期にかけての瓦片や近世の土器類も出土しているが、紙面の関係上今回の報告では遺構内出土遺物と流土からの出土ではあるがお龜石古墳に関係すると思われる須恵器類を中心に掲載する。

### 1 中世・近世遺構出土遺物

#### 土器・土製品類（第17図）

1～4は瓦質の羽釜である。いずれも鋸柄氏分類<sup>(註1)</sup>のC群Ⅲ・Ⅳ類に属するものである。

1は第2調査区中世遺構面出土。緩やかに内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部は水平に仕上げられているが、やや丸みを残す。体部外面は鋸部下に横方向の削りが僅かに認められる。内面は鋸部上位に横方向の刷毛目が僅かに残る。口径22.4cm。

2は第8調査区中世遺構面出土。やや直立気味に内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部は水平に仕上げられる。体部は丸みが失われ、寸胴化している。体部外面は上半は横方向の削りが行われているが、下半部は縦方向の削りも観察される。内面はナデ調整が行われている。口径25.7cm。

3は第7調査区中世遺構面出土。緩やかに内湾する口縁部の外面に凹線が3条廻る。口縁端部はやや丸みを帯びるがほぼ水平に仕上げられている。ほぼ水平に仕上げられた鋸部の下端には縦方向の削りが行われている。内面は横方向の細かな刷毛調整が行われており、口縁下端のみナデ調整が行われる。口径25.4cm。

4は第7調査区中世遺構面出土。口縁部は緩やかに内湾するが、端部で直立している。口縁端部はほぼ水平に仕上げられている。口縁外面は凹線が3条廻る。体部外面は横方向の削りが行われ、内面は体部に横方向の刷毛調整が行われ、口縁部はそれを横方向にナデ消している。口径24.0cm。

5は第1調査区溝状遺構1出土の瓦質の片口擂鉢。口縁部をやや上下に発達させてる。外面は横方向を主体とした削りが行われている。内面は摩耗が激しいが、5～8本単位の鋸目が観察できる。口径32.2cm、器高12.8cm。

6は第8調査区中世遺構面出土の土師質の擂鉢。口縁部下端をやや発達させる形態である。外面はナデ調整、内面は横方向の刷毛調整が行われている。口径30.5cm。

7は第1調査区溝状遺構1出土の土師質の皿。底部は軽い上げ底状のいわゆる「ヘソ皿」である。底部外面は指押さえ後ナデ、口縁部内外面は横ナデが行われる。乳白色を呈する。口径10.8cm、器高2.2cm。

8は第7調査区中世遺構面出土の土師質の皿。底部は丸みを帶びており、口縁部内外面を横ナデすることにより外面に稜を有する。底部外面は指押さえ後ナデを行う。器形、製作技法とも9の瓦器皿と類似する。赤褐色を呈する。口径11.7cm、器高2.3cm。

9は第9調査区中世遺構面出土の瓦器皿。製作技法的には8と同様であり、暗文も有さない。尾谷氏分類<sup>(註2)</sup>の3類に属するものと考えられる。口径12.2cm、器高2.7cm。

10・11は第9調査区中世遺構面出土の土師質の板状土製品。両者とも二側縁に面を形成している。全面摩耗しており調整痕は確認できない。10はやや湾曲しており、凹面端部付近には突帯状のものが剥離したかのような痕跡が残っている。この2点の他にも同一面上に多数の破片が散乱する状態で出土しており、また各調査区の流土内からも同様の土製品の出土が見られる。現状では不明土製品として報告するしかないが、奈良県香芝市平野2号墳では、横穴式石室内から多数の土師質の博状遺物の出土が報告されており、報告者はそれらの内平板状のものを棺敷等の棺台の用途ではないかと考察を行っている<sup>(註3)</sup>。お龜石古墳出土のものも、埋葬施設の一部として使用された可能性を残しておきたい。

12は第6調査区中世遺構面出土、13は第2調査区中世遺構面出土の土師器高杯片。13は中空の脚部片であり、内面に僅かにしづりが観察される。いずれも中世遺構面から出土しているものの、形態から古墳に関連する遺物である可能性がある。

#### 平瓦（第18図）

1は第1調査区溝状遺構1の第37層出土。凸面に縦方向の繩叩きが残る。

2～4は第7調査区中世遺構面出土。2は広端部側の破片であり、凸面に離れ砂状の砂粒が残るが、胎土中にも同様の砂粒を多く含むために判別不明である。3は狭端部側の破片である。凸面中央部側には縦方向の繩叩きが残る。凹面には明瞭な糸切り痕と縦方向の叩き痕が残っている。凸面に離れ砂が残る。4は広端部側の破片であり、凸面に縦方向の繩叩きと離れ砂が残る。凹面には模骨痕状の凹凸が残るが、縦方向の調整によるものと考えられる。

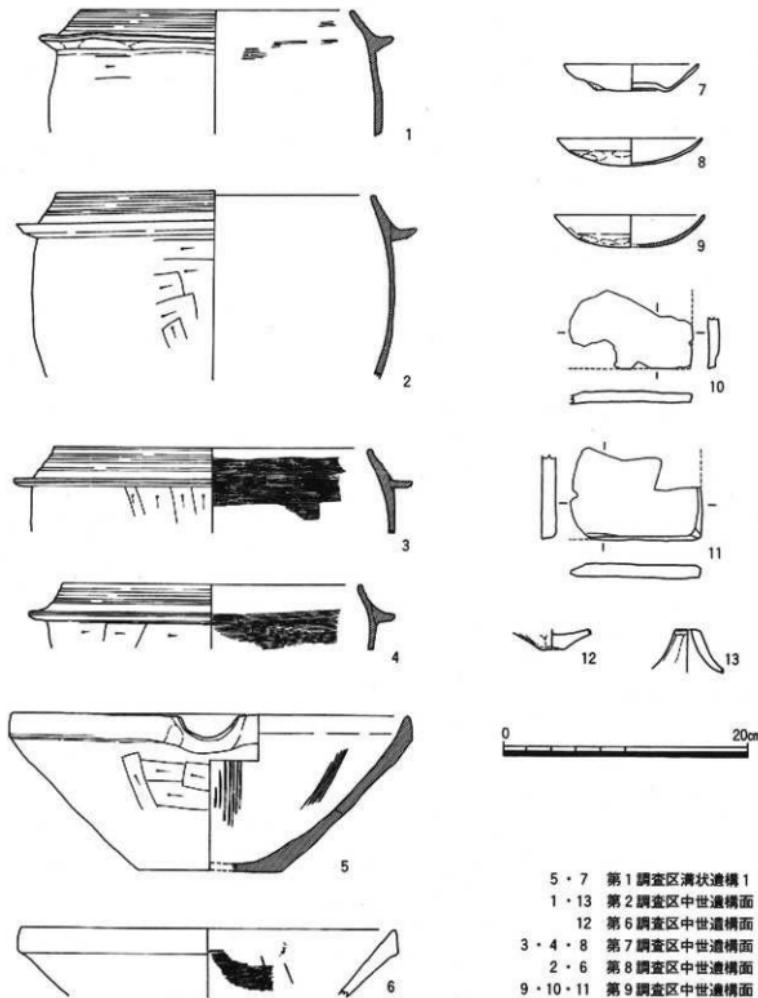
5は第7調査区土壤出土。狭端部から広端部まで残存する半損品であり、全長32.6cmを測る。凹凸両面に離れ砂状の砂粒が残るが、胎土中にも同様の砂粒を多く含むため判別不明である。4と同様に凹面には模骨痕状の凹凸が残るが、縦方向の調整によるものと考えられる。

#### 鉄器類（第19図）

1～5は第1調査区の土壤出土。釘と鎌の破片と考えられる。一部木質が残る部分がある。6は第5調査区石組遺構内出土の釘。釘身全体に木質が残っている。7・8は第7調査区の土壤出土。釘の破片と考えられるが、2点とも先端が屈曲している。

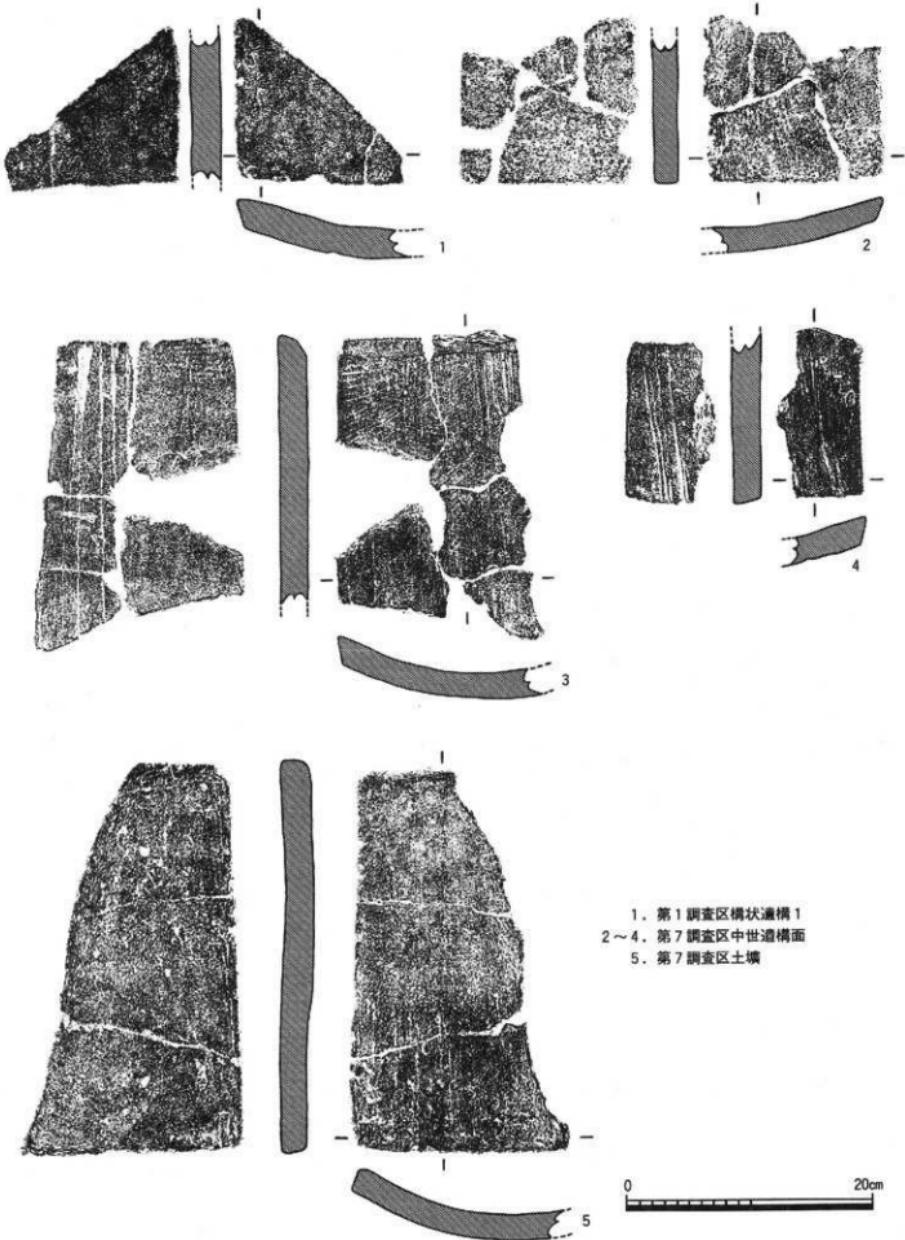
#### 銅鏡（第19図）

9は第1調査区土壤出土の寛永通宝。新寛永銭に属する。「永」字部分は湯の回りが悪く、筋状に銅質が欠落している部分がある。直径2.45cm。

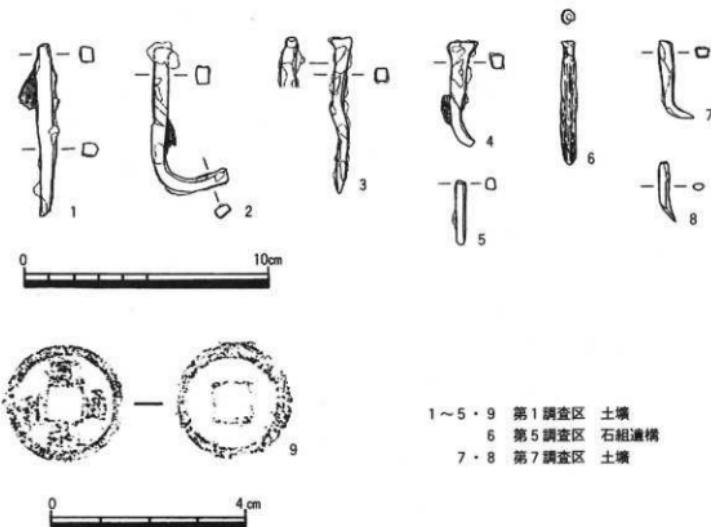


- 5・7 第1調査区溝状造構面  
1・13 第2調査区中世造構面  
12 第6調査区中世造構面  
3・4・8 第7調査区中世造構面  
2・6 第8調査区中世造構面  
9・10・11 第9調査区中世造構面

第17図 中世造構出土土器・土製品



第18図 中世遺構出土平瓦



第19図 中世・近世遺構出土鉄器類・銅錢

## 2. 出土須恵器類（第20図）

1は第9調査区第3層上面出土の短頸壺。直立する口縁を有し、体部はやや肩の張る形態である。外面底部は回転ヘラ削りが施されている。口径5.0cm、器高6.4cm。灰色を呈する。

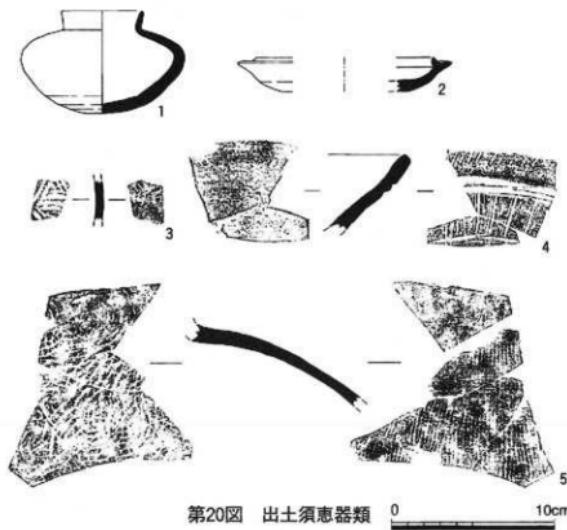
2は第9調査区第3層出土の蓋杯の杯身。立ち上がりは矮小化している。小片であるため、口径の完全な復元是不可能であるが、10cmから14cm内におさまる。灰白色を呈する。

3は第1調査区溝状造構2の底面出土。小片であるため器種は不明。内面には同心円の當て具痕、外面にはわずかに叩き痕が残る。灰白色を呈する。

4は第7調査区の盛土流土内から出土した壺の口縁部片。外面口縁端部下には櫛状工具により縦位の列点文が連続して施されている。その下方にはヘラ状工具による縦方向の沈線が連続して施されており、その上下端に横方向の幅太の沈線が廻っている。内面はナデ調整が行われている。灰白色を呈する。

5は第7調査区の盛土流土内から出土した壺の肩部片。4とは同一個体と考えられる。頸部に至る部分で折損している。内面には同心円の當て具痕が残り、頸部に至る付近は横方向のナデが行われている。外面には平行叩きが行われているが、一部横方向にナデ消している。灰白色を呈する。

これらの土器は、3以外はいずれも遺構に伴うものではなく、原位置での出土ではないが、1・2は狭道部東側からの出土であり、4・5は墳丘裾部盛土直上の流土からの出土である。お亀石古



第20図 出土須恵器類 0 10cm

墳に伴う土器である可能性が高いと考える。

時期的には、いずれも7世紀の第2四半世紀内におさまるものである。

#### 【註】

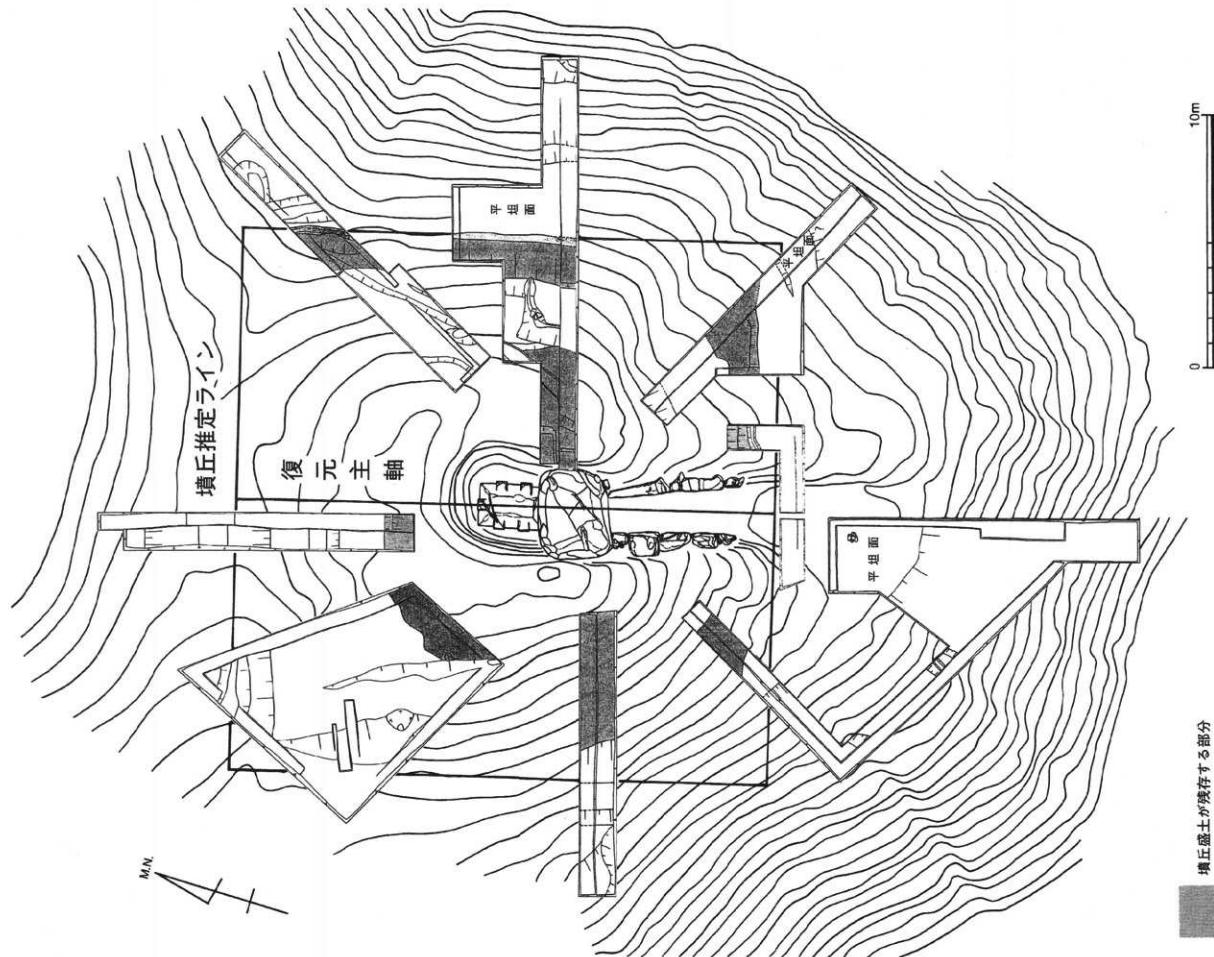
- 1) 鐘柄俊夫(1989)「第1章 大阪府南部の瓦質土器生産(1)」、財團法人大阪文化財センター(編)『大阪文化財論集—財團法人大阪文化財センター設立15周年記念論集—』、大阪
- 2) 尾谷雅彦(1994)「第5章第3節 土釜埋納瓦質焼・皿の変遷」、河内長野市遺跡調査会(編)『天野山金剛寺遺跡』(河内長野市遺跡調査会報録)、河内長野(大阪)
- 3) 下大迫幹洋(2001)「II 平野2号墳第2次調査」、香芝市二上山博物館(編)『香芝市埋蔵文化財発掘調査外報14—平成12年度—』、香芝(奈良)

## VII まとめ

### お龜石古墳墳丘プランの復元(第21図)

今回の調査により、お龜石古墳は中世期、実年代で14世紀後半から15世紀初頭にかけての時期に、墳丘周縁の改変が行われたことが明らかとなった。その改変範囲は、墳丘北側から東側、南側にかけて「コ」の字形に及んでいる。また、第Ⅱ章第3節第2項で述べたように、お龜石古墳に用いられたと考えられる閉塞石が中世造構面から出土する状況から見て、同時期に主体部の破壊(盜掘)が行われた可能性が高い。

この様な状況下ではあったが、幸運にも墳丘東側の第7・第8調査区において、墳丘の裾部分を、



第21図 お倉石古墳墳丘プラン推定図

墳丘盛土が残存する部分

第1調査区では丘陵から墳丘を切り離す区画溝を確認することができた。

まず、第7・第8調査区では、墳丘裾部の盛土と共に、墳丘の裾部を設定する溝が検出された。盛土と溝は南北方向に直線的に延びている。このことにより、お亀石古墳が方墳であることが確認された。

盛土は溝の埋土上にまで及ぶ部分と及ばない部分がある。今回の調査の結果によってお亀石古墳の墳丘上には葺石・敷石などの外部施設が存在しないことは確実であるため、墳丘は完全な土造りであったことになる。したがって墳丘築造後の盛土の流失を考慮に入れると、墳丘の平面規模に関しては、この溝が墳丘平面プランを復元するうえでの基礎資料となる。

また、現在確認し得る墳丘裾部（墳丘区画溝と残存する墳丘盛土の下端部）の高さを見ると、第1調査区の溝状造構2の底面高がT.P.96.6m、第2調査区の溝状造構の底面高がT.P.96.9m、第3調査区の盛土下端がT.P.96.98m、第4調査区の盛土下端がT.P.96.5m、第6調査区の盛土下端がT.P.96.65m、第7調査区の盛土下端がT.P.96.7m、第8調査区の盛土下端がT.P.96.9mである。石櫛として利用されている家形石棺の底面がT.P.96.87mである点から見て、墳丘裾部を石櫛底面に一致させていると考えられる<sup>(註1)</sup>。の中でも、第1調査区の溝状造構2の底面がやや低いものの、全体的な傾向から見ると墳丘裾部は北側が僅かに高く、南側が僅かに低かったようである。このような規格性も、墳丘復元の上で大きな役割を担うと考える。

第7調査区の南壁・北壁、第8調査区の北西壁で断面確認した溝の東側肩部を直線で結ぶと、調査主軸に対して、N 2° E のラインを示すことになる。これは、お亀石古墳で石櫛として使用されている家形石棺の主軸が、調査主軸に対して N 4° E であることに相関するものと思われる。のことから、お亀石古墳は石櫛の主軸方向を基に築かれた方墳である可能性が高いと言える。

そこで、今回の墳丘復元においては、復元基点を石櫛部蓋石北側の繩掛突起北端部中央に置き、その点から墳丘裾部設定溝のラインである調査主軸 N 2° E を復元主軸とした。

復元主軸からの墳丘裾部設定溝の東側肩部までの直交距離は、10.75mになる。溝を超える範囲での盛土は想定されないため、この長さを2倍にした距離21.5mが墳丘東西幅の最大値となる。

そこで、裾部設定溝から、第1調査区の墳丘区画溝底面南端に直交するコーナー部分を導き出し、そのコーナー部分を基点として一辺21.5mの正方形を垂直投影した。第45図の墳丘推定ラインである。

まず、この墳丘推定ライン内で、各調査区での墳丘盛土の残存部分がすべて収まっていることが確認できる。その上で注目できるのは、第3調査区の地山傾斜変換部である（第6図参照）。第3調査区では、残存する墳丘盛土西端から西側に地山は約20度の傾斜角で降下するが、調査基点から西に10.65mの地点で約10度の緩傾斜へと変化する。この傾斜変換部が墳丘推定ラインの西辺にはほぼ一致していることが看取できる。地山面は、この先も傾斜変換を繰り返しながら西側に降下していくために断定はできないものの、この地点がT.P.96.48mであることからも、この傾斜変換部分に墳丘西側裾部が反映している可能性が高いと考える。

さらに、第4・第6調査区においても、墳丘推定ラインにほぼ一致する地点で地山が傾斜変換している。ただし、第6調査区での地山の落ち込みは微弱なものであり、また墳丘南側は中世期に改変が加えられているため、確実なものとは言えないことを付記しておく。

以上の考察から、この墳丘推定ラインが現状ではもっとも妥当なものであるという結論を得るに至った。この場合、墳丘の築造基点（墳丘中心点）は、復元主軸上で石櫛（家形石棺）の中心部よりやや北に位置することになる。墳丘東西幅に関しては、今回の復元では最大値（墳丘東側の墳丘裾部設定溝の東側肩部）を求めていたため、古墳築造時に墳丘設定が溝の中央部分で行われたとすると、微少ではあるが規模が小さくなる可能性も残している。墳丘南北長も、墳丘南側に関しては明確な根拠を得るには至っていない。復元ラインでは、現存する淡道部の南端の側石からさらに1m以上墳丘が前方に延びることになる。この問題に関しては、今後の調査・研究で解明すべきと考える。

また、墳丘東側から南側にかけて、墳丘裾部外周に平坦面が廻っている。「IV調査成果 7第7調査区」で述べた理由により、これは古墳築造時に形成されたと考えられる。この平坦面は、現状では第4調査区で確認できていないため、墳丘の南面から東面にかけて「L」字状に廻っていたものと見なしたい<sup>(註2)</sup>。

墳丘上部の段築等の構造については、今回の調査では確認するに至らなかった。しかしながら、第3調査区の墳丘盛土の残存状況（第7図参照）を見ると、この範囲での段築は想定し難い。可能性としては、幕壇から主体部天井石を覆う範囲での上段部の存在が残るであろう。

以上をまとめると、お亀石古墳は墳丘背後を溝によって区画した一辺を最大21.5mとする方墳であり、付属する施設として墳丘南面から東面にかけて平坦面を形成しているという調査成果となる。

#### 【註】

- 1) このように石櫛部基底面と墳丘盛土基盤面が一致することが横口式石櫛墳の特徴であることは、一瀬和夫氏によって指摘されている。（一瀬和夫（1988）「終末期古墳の墳丘」、網干善教先生華甲記念会（編）『網干喜教先生華甲記念考古學論集』所収、網干善教先生華甲記念会、吹田。）
- 2) このような平坦面に関して、テラスまたは基壇という用語が用いられることがある。都出比呂志氏は、古墳時代終末期の古墳が丘陵の斜面部に位置することが多いことを指摘した上で、それらの古墳がテラス状の基壇を作りだしている場合には、丘陵の低い側と側面には存在するが高い側には作らないのがふつうであるから段築とは区別すべきと述べている。さらに氏は、このテラスが横穴式石室原理の儀礼の定着とともにあって、葬送儀礼の場が入り口付近の前庭部とその周辺に移ったために、この時期に新たに生まれた儀礼用施設と考えている（都出比呂志（1992）「墳丘の型式」、石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎（編）『古墳時代の研究7』所収、雄山閣出版株式会社、東京）。お亀石古墳においては、さらに丘陵下方で墳丘施設が存在する可能性も完全には否定しきれないため、現段階では「平坦面」という名称を与えて認識しておく。

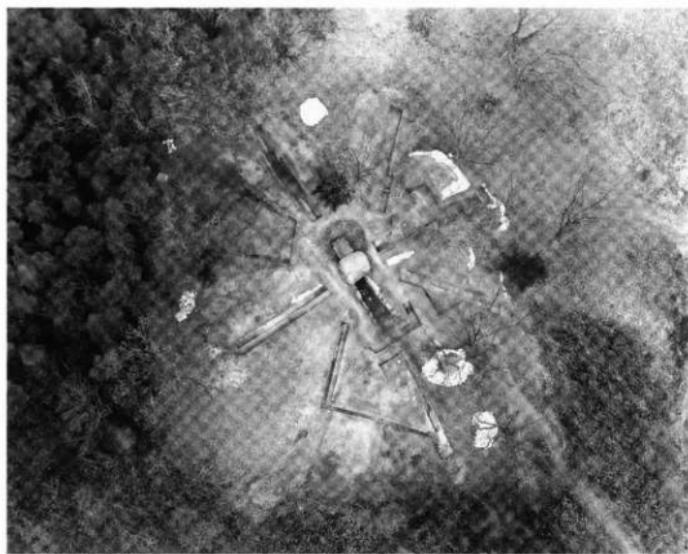
# 報告書抄録

ふりがな	へいせい11ねんど とんだばやしないいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成11年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書							
副書名	富田林市埋蔵文化財調査報告							
卷次	33							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	横山 成己							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎ 0721-25-1000							
発行年月日	西暦 2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° °'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
お亀石古墳	富田林市 大字中野	27214	19	34° 30' 32"	135° 36' 5"	2001.11.19~ 2002.3.29	240	古墳の墳形 と規模の確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
お亀石古墳	古墳	飛鳥時代 室町時代	墓壙・墳丘盛土 区画溝・平坦面・ 土壤	瓦・須恵器・土師器 瓦器・鉄器・銅錢			墳形と墳丘規 模を確認	

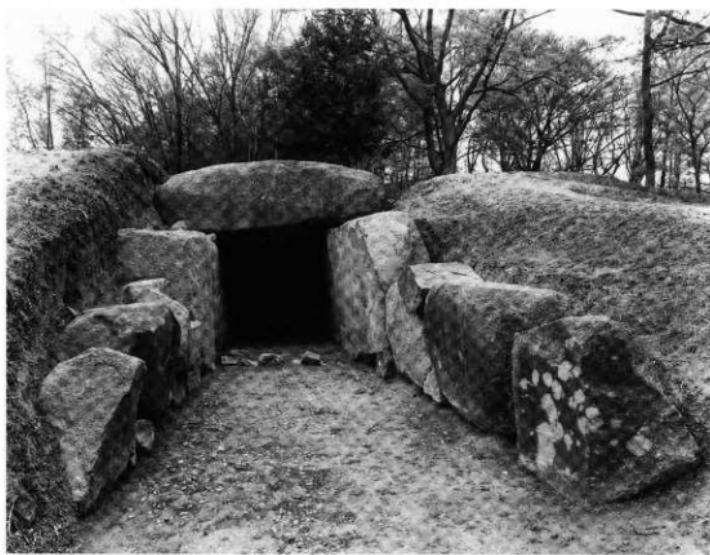
# 図 版



新堂廃寺跡・オガニ池瓦窯跡・お龜石古墳全景 南東から



お龜石古墳全景 南上方から



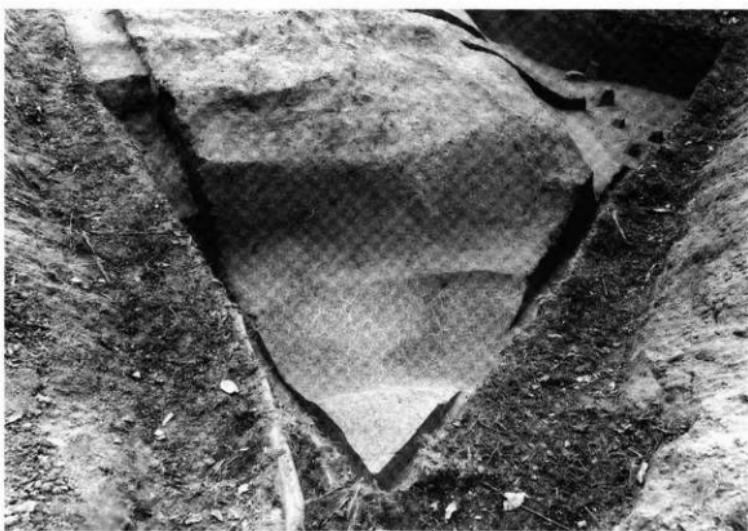
お亀石古墳開口部 南東から



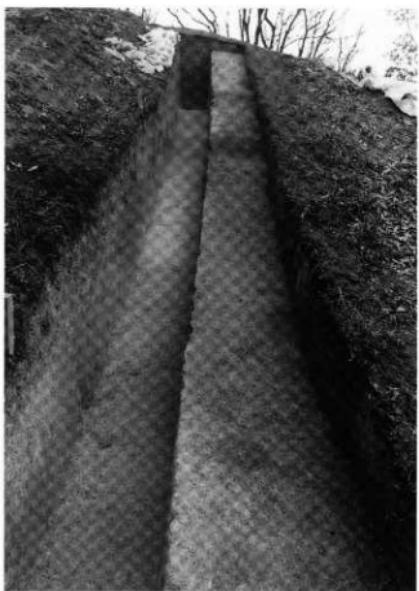
お亀石古墳主体部 北西上方から



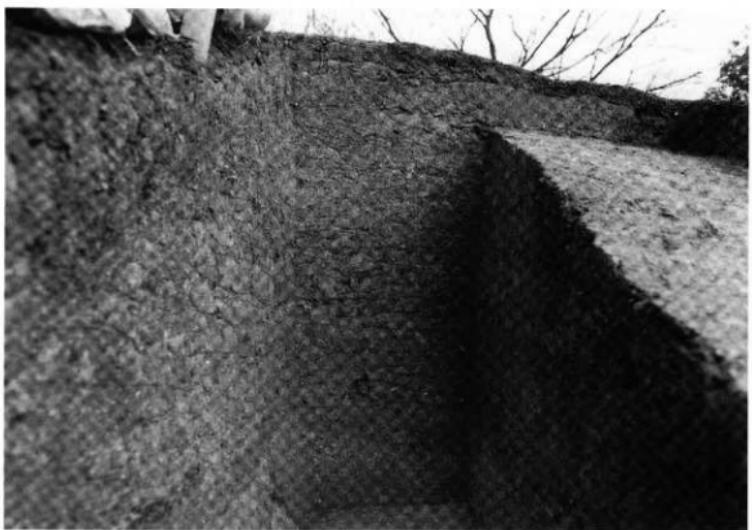
第1調査区全景 北から



第2調査区北半部 北から



第3調査区全景 西から



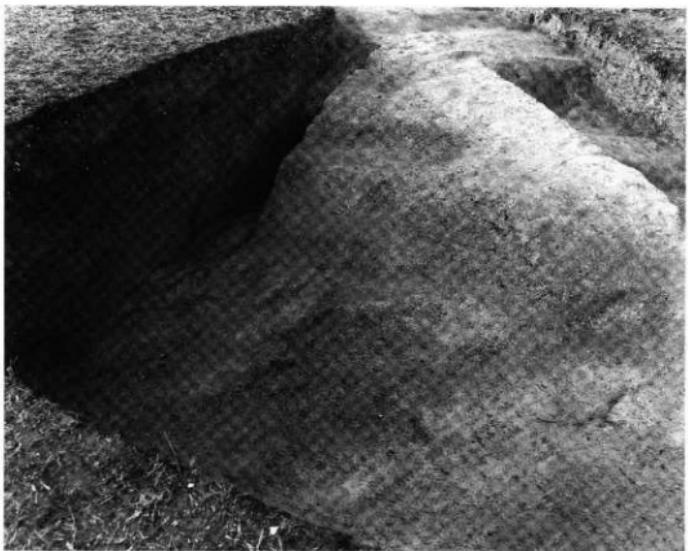
第3調査区盛土断面 西から



第4調査区全景・閉塞石群 北東から



第5調査区北半部 北から



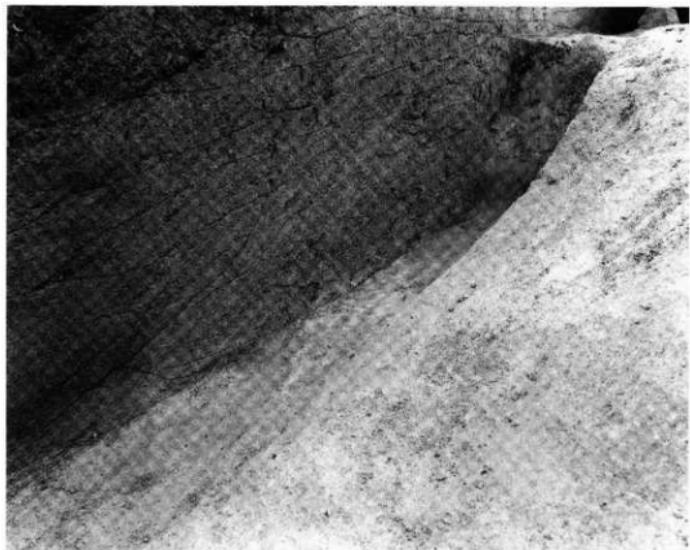
第6調査区盛土残存部分 南東から



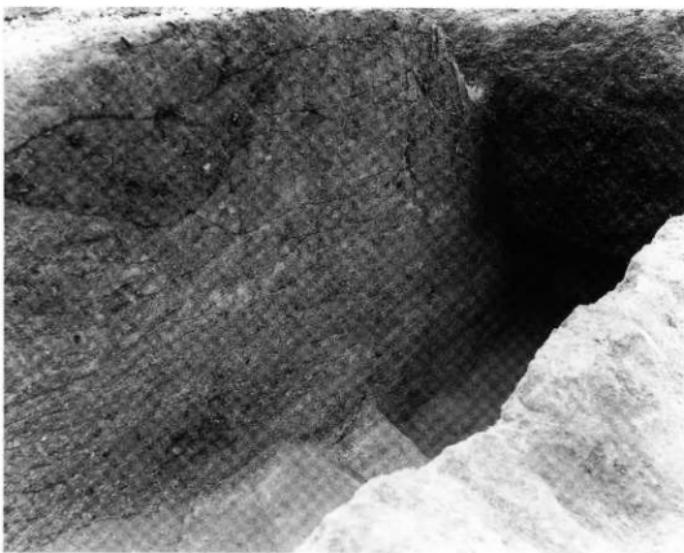
第7調査区中世土壤 北西から



第7調査区埴丘裾部 北東から



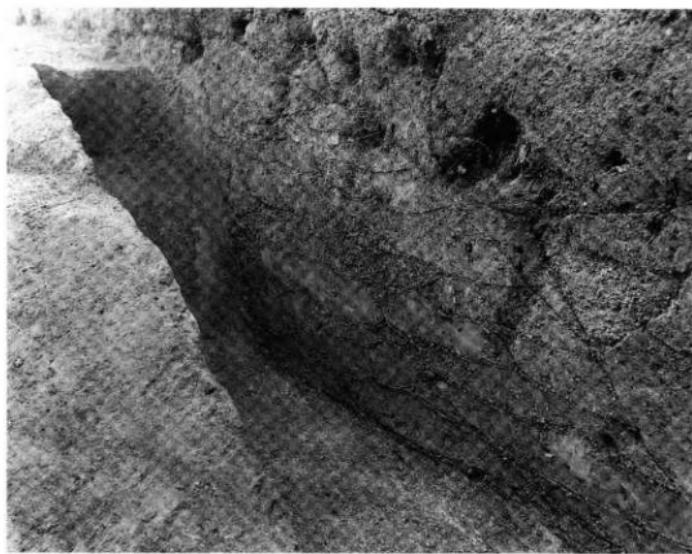
第7調査区埴丘裾部盛土断面 北東から



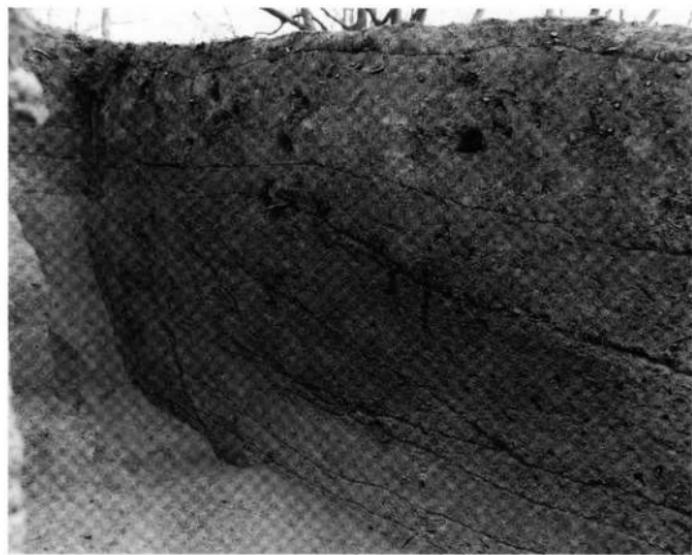
第7調査区墓壙埋土断面 北東から



第8調査区北東半部 北東から



第8調査区填丘裾部盛土断面 東から



第9調査区東壁断面 南西から

## **富田林市埋蔵文化財調査報告33**

発行年月日 2002年3月29日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

2002.

